

94-58

正三位子爵 福羽美静題歌

文學士 中内蝶二序文

文學士 柳生修序文

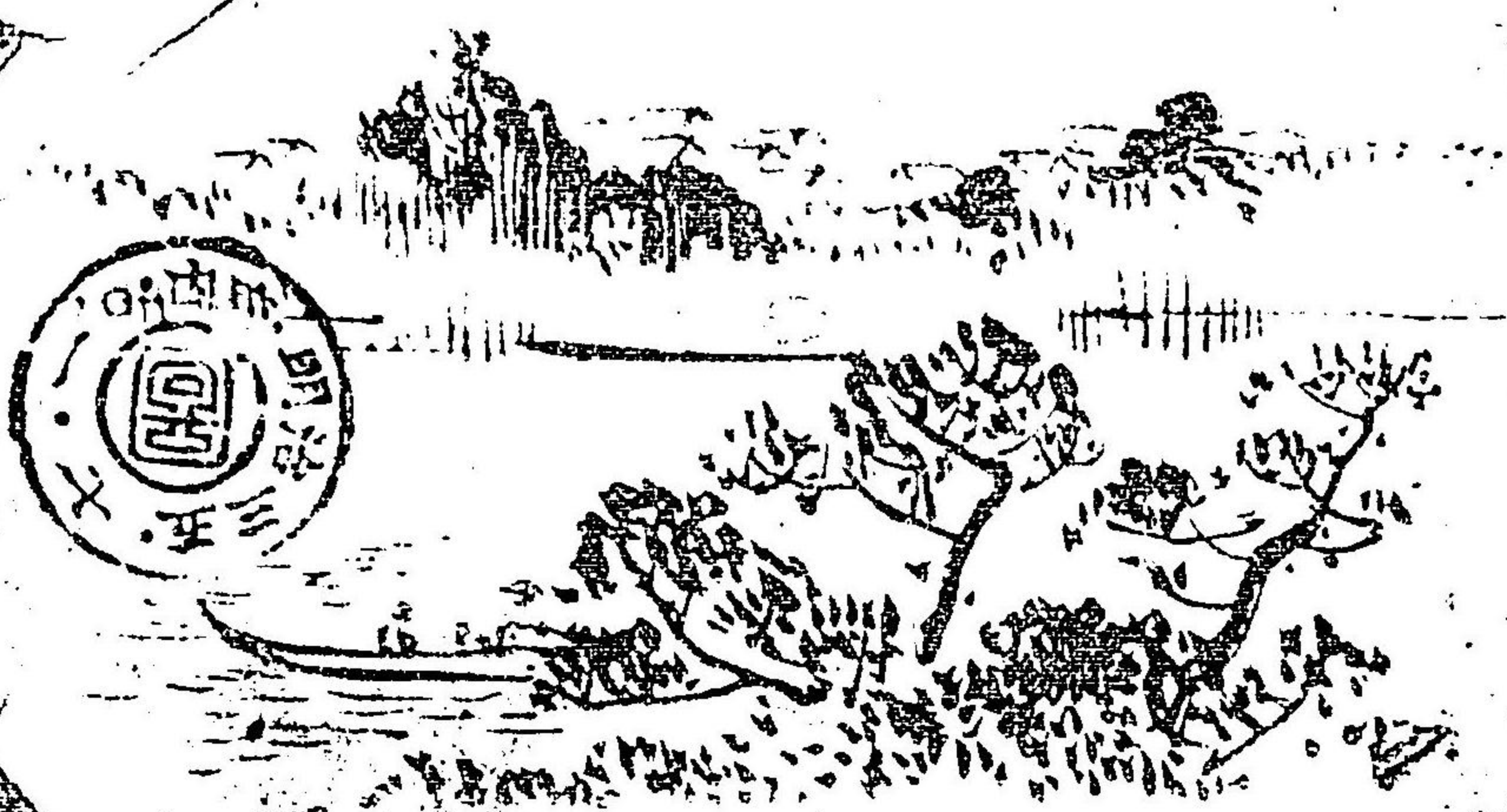
岸上一操序文

必學
讀生

旅行之友

東京

文光堂藏版



歌題生先靜美羽福爵子位三正

正三位
美羽福
靜生先
歌題

序

自然は一大詩卷なり。旅行は活きたる學問なり。よ
しや萬卷の書を讀破して學ぶところ古今をきはむれ
ばとて身常に一室の外に出でず足未だ他郷の土を踏
まざるものにしていかてか自然の美を歌ふことを得
べき。いかてか天下の形勢に通ずることを得べき。
是を以て古來詩人文士と呼ばれ英雄豪傑と稱せらる
人々は、いづれも四方に客遊し、山水の間に放浪して
以て詩想を養ひ、以て見聞を廣うせざるはなし。身軀
の健康や精神の快樂やさては自然の感化や時勢の運

曉や、旅行によつて得る所の効益は、予が故さらに贅言を費すまでもなし、天下有爲の青年諸君、試に此書を繙きたまはゞ、旅行の趣味ものづから明かならむか。

明治壬寅初夏

駒籠紅雨樓にて

中内蝶二

序

誰か旅行を贅澤といふ？

風清く、月明に、美なる山、洋々たる水を探ねて、乃ち之に筈をひかむは、げに贅澤の極なるらし。されど生活の劇烈なる戦場に、痛手を負ひて、唯一服の清涼劑をと思へるとき、瓢然都門を出て、山水に放浪す、蓋し人生の一快事也。若し夫れ此の時に際して、却て足を熱間場埋に入れ、心を人生の煩悶窟に投じ、變化を願ひ、見聞を廣くし、勞して而して益強壯たらむことを欲するに至つては、眞に所謂ロングフェローが神聖なる者。

廣く日本人の行爲を察するに、彼等が以て旅行と稱するもの、贅澤三昧に非らずんば、薄志弱行の表章のみ。否、否、彼等は三伏の暑、暑を山水明媚なる所に避けて、而して却つて醜業婦を抱いて、獸慾を貪りつゝあり。あゝ暑ぐるしからずや。彼等は寒風凜烈の候、寒を暖風海面を吹く所に凌ぎて、而して却つて醜業婦の爲に油氣を絞られつゝあり。あゝ、また寒からずや。誰か暑中休業を休業といふ？ 誰か旅行を氣休となりといふ？

In the world's broad field of battle,

In the bivouac of Life,

Be not like dumb driven cattle!

Be a hero in the strife!

旅行者また這般の覺悟なくんば、山河の跋涉、都會の見聞も、猶遂に贅澤三昧ならむのみ。猶遂に薄志弱行の表章たらむのみ。あゝ、願くは神聖なる旅行を爲せ！ 聊か旅行に對する余輩が所感を述べて、暫時以て本書の序と爲す。

本郷根津の寓居にて

桐生 悠々

しるす

明治卅五年六月廿二日

序

諺に曰く可愛い兒には旅をさせると旅は能く智見を益し併せて身軀を健にするの得あればなり況して浮世は萬物の逆旅にして光陰は百代の過客なるをや我も旅人他も旅人此處も宿屋彼處も宿屋なれば常に草鞋と旅籠錢の用意なかるべからずさてこの一冊子實に旅の好き道づれにぞあんなる

寅年の夏七月

岸上質軒

自序

今や都下各學校は孰れも試験を終へたり諸官廳は亦將さに夏期休業に近からんとす世間多幸の人々は謂ふまでもなく官吏學生諸卿を始め少しく餘裕あるものは到底此の都門の暈熱に堪へずして或は故郷に或は別莊に或は海浜山奥に避暑探涼歸省ものゝ其便宜に隨へて一味の清風を逐ひつゝ消夏の工夫に汲々たるならむ。此際此著を出したるは少しく讀者の嗜好に諛ふの詭を免れずと雖も余は從來吾が日本人が海●の●日●本●の●國●民●と●し●て●生●れ●し●か●ら●は●海●事●思●想●を●養●成●

序

諺に曰く可愛い兒には旅をさせろと、旅は能く智見を益し併せて身軀を健にするの得あればなり、況して浮世は萬物の逆旅にして光陰は百代の過客なるをや、我も旅人、他も旅人、此處も宿屋、彼處も宿屋なれば、常に草鞋と旅籠錢の用意なかるべからず、さてこの一冊子、實に旅の好き道づれにぞあんなる

寅年の夏七月

岸上質軒

自序

今や都下各學校は孰れも試験を終へたり、諸官廳は亦將さに夏期休業に近からんとす、世間多幸の人々は謂ふまでもなく官吏學生諸卿を始め、少しく餘裕あるものは、到底此の都門の暈熱に堪へずして、或は故郷に、或は別莊に、或は海浜山奥に、避暑探涼歸省の、其便宜に隨へて一味の清風を逐ひつゝ、消夏の工夫に汲々たるならむ。此際此著を出したるは、少しく讀者の嗜好に諛ふの語を免れずと雖も、余は從來吾が日本人が海●の●日●本●の●國●民●と●し●て●生●れ●し●か●ら●は●海●事●思●想●を●養●成●

する機關として、各地の人情風俗の上に智識を擴むる手段として、北は北海道南は臺灣せめては帝國領域の地理歴史を實際に探險する方略として、纖弱なる國民の健康を恢復し、因循なる國民の引込思案を廓清する功夫として、唯吾が同胞に今少しく旅行の趣味、旅行の愉快、旅行の利益、旅行の慣習等を領解せしめ、而して大に此の旅行を流行せしめむことを企てたり、然るに吾が日本人の旅行を見るに、何となく不愉快にして、多くは已むを得ざる義務の爲めか、亦は餘義なき用事ある場合に限り、唯此の旅行の必要を知るのみ、その他は、旅

行を以て一に贅澤の行事として之れを斥け、門外より庭園に入り、庭園より小暗き室内に籠り、小益、小狹愈、狹終日鬱々として徒らに静思に耽り、國民活動の元氣をた將さに沈死せむとす、是れ決して國家の慶事にあらざる也。

近頃人あり英國より歸朝す、談偶ま旅行に及ぶ、曰く英國人の氣風は日常の談話に於けるも世界的なり、故に姉が濠洲に旅立ちせしとか、或は妹が加奈陀に渡航せしとか、或は兄が中央亞細亞に學問研究の爲め視察に出かけしとか、或は弟が商用の爲め極東に出張せしと

か彼等國民の世界を見ること殆ど隣里の如し而して
 其歸りし時は一家團欒して其旅行先の人情風俗地理
 歴史等を聞くを以て無上の快樂とせりと余は之れを
 聞き窃かに謂ふ噫斯國にして斯民あり斯民にして斯
 國あるかと願みて竦然たり。

嗚呼獨國宰相ヒスマークは何地より聯邦統一論を齎
 せしか千古の獨見家林子平の海國兵談は果して讀書
 堆裏より思著さしか伊國イトナの山靈は英國グラッ
 ドストーンの胸中を透して如何なる活動を英國政治
 社會に及ぼせしか池大雅は芙蓉の山靈に謁して如何

に自然美を發揮せしむ。
 語を寄す天下の青年よ人生功を建て名を揚ぐ豈に都
 門のみならむや何ぞ其活眼を世界大に注がざる旅行
 せよ大旅行を企てよ。

明治三十五年七月

編者識

書を讀む可なり、然れども足跡天下に遍き者にして、讀書亦以て用を爲すに足れり、癩等足未だ里閭を出てず、萬巻を讀破するも、竟に何の用をか爲さむ……………林子平

余は孤筇單歩して旅行する時の如く未だ會つて我は我の主宰者として行住自在敢て外物の爲めに犯されず、其克く獨立不羈の意思を満足せしむるものあるを見ず、旅行は誠に余をして余の思想を鼓舞發揮せしむ、旅行中の余の眼前には始終新たなる天國あるが如し……………ルイテ

余を乗せたる旅行は一路遙々として余が悲哀の情を荷ひ行けり、旅行は其重きを厭はず、疲れても尚ほ余の身を乗せて行けり、シエークスピア

必學
讀生
旅 行 之 友

目 次

前 編 偉人と旅行

一	ピスマークと瑞典旅行……………	一
二	横井小楠と江戸旅行……………	六
三	ベートル大帝と外國旅行……………	一七
	出立「リカ」に入る「驢馬」に入る「和蘭」に入る「英國」に入る「旅中の逸話」……………	
四	林子平と視察旅行……………	二五
五	ルーテルと旅行……………	三〇
六	池大雅堂と修學旅行……………	三六
七	ゲーテと諸國旅行……………	四三
	瑞西旅行―諸國漫遊―伊太利旅行……………	
八	シエークスピアと出郷旅行……………	五〇
九	俳聖芭蕉と旅行……………	五八
十	クラッドストーン伊太利旅行……………	六九

後編 名士旅行逸談

一	學生旅行冒險談	一〇三
二	佐野伯の轡馱雜談	一一一
三	菊地侃二氏の涼車乗越	一一六
四	磯部四郎巴里遊學	一二〇
五	増島バリストル鐵道をへこます	一二三
六	幸田露伴氏の旅行の掟	一二六
七	土方伯瘦馬を敬禮す	一三〇
八	故後藤伯お芋を托せらる	一三三
九	鳩山春子夫人米國に於て政黨改造を説く	一三六
十	タルマバグ氏の鳥飼物語	一三九
十一	松方伯門出の壯語	一四二
十二	加藤高明氏の旅行談	一四五

附録

海外渡航規則……………
 内外郵船乗客賃金表……………

目次終

學生旅行之友

大内徳亮編

前編 偉人と旅行

一 ビスマルク公と瑞典旅行

(Bismark and Sweden travel)

鐵血政略の開山國家社會主義の始祖獨帝國の建設者
 として前代未聞の快腕克く歐洲全土を風靡せる比公
 公や公の生涯中何れの頃より此の偉大なる思想を啓

發し、この活舞臺の端緒を開きたる歟、誰か知らむ、公は之れを書卷堆裏の學窓に於てせずして散漫放遊の客窓に於てし、公は之れを繁鬧雜踏の都門に於てせずして閑雅幽邃の林邑に於てし、公は之れを故郷に於てせずして遙に瑞典南境の旅先より齋らし來らむとは。』比未だ伯林大學に在るの日、最も嗜める學科として歴史と地理とを愛讀せり、而して其の歴史を讀み地理を學べるは之れを科學の智識を獲んと欲して研究したるに非ず、他日將さに爲すあらむがための實用學科として修養したるなり、故に其學窓の下に得たる智能の

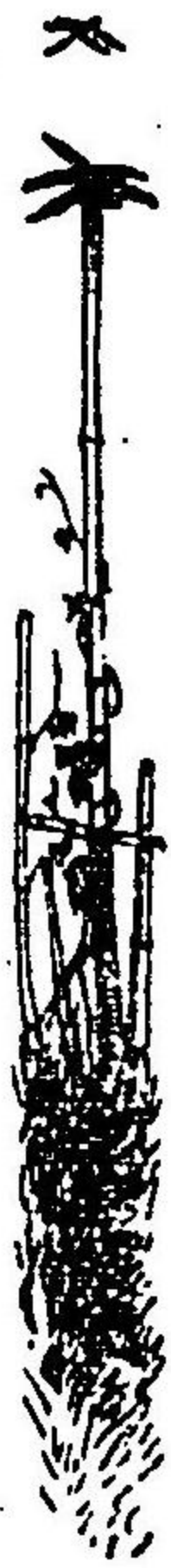
啓發は或は同窓の儕輩に比して寧ろ大に遜色ありて、點數の多寡を争ふ試験場裡には何時も好成绩を得る能はざりしと雖、此等區々たる小事公の素より關り知る所にあらず、公は大學の教程を卒ゆるや一時故郷なるポメラニアに歸休し、擅まに豪放散漫の生活を極めたりしが、少時もなく公は漫遊の途に上り地理歴史の實地踏査を試みたり、其内地を旅し侯國割據の形勢を目睹するや、我が愛する日耳曼の山河が何故にナポレオン一世の馬蹄に蹂躪せられたるやの疑を氷解し、其英國に旅行し佛國に漫遊するや、大に中外の形勢に感

じ心に啓發する所ありき。

此頃、公は故郷ポメラニアを出て、飄然瑞典の南境なるロトルテルエル氏の家に遊び、日と獵銃を肩にし山林を跋渉し心機鋭發氣宇洞朗轉々坤輿を提げて天風に御ずるの概あり、公將さに氏の家を辭し、歸途に就かむとする前夜、一場の議論は端なく公とロトルテルエル氏との間に起り、公が熱切なる肺肝を迸り出づる破鐘大の音響は深けゆく山林の空氣を破りたり、曰く日耳曼聯邦は必ず統一せられざる可からず、是れ斷乎として僕の信じ且つ主張する所なり、僕不敏と

雖他日聯邦統一の宏圖を成就し吾祖國の光榮を中外に發揚するを期せん

と辭氣頗る勵聲色甚だ壯んなり、嗚呼公が此のかりそめの旅先に於て憶りなく啓發せる大智能は遂に獨帝國の建設者として千載不朽の光榮を荷はしめき。



二 横井小楠と江戸旅行

(Shonun Yokoi and Yedo travel.)

徳川三百年太平因循の極、邦家は宛も弊舟の怒濤に漂へるが如く、廟堂恬然、列藩騷然たり、此時に當り、横井小楠は時勢の澄清に任じ、國事の振興に當らんと、一度劍に杖りて阿蘇山下を發足してより、曾ては江戸に遊びて天下の志士と交はりたるが如き、又曾ては男子の出處進退豈に苟にすべけむやと慨し、江戸に留る事僅に一歲にして去り、歸路特に中仙道を擇びたるが如き、又曾ては志士徒らに蕪臥するの秋にあらずと嘆し、上國

諸藩を歴遊せるが如き、南船北馬、席暖かなるに暇なく、彼が七寸の鞋痕殆ど天下に普ねし。然れども彼が旅行の目的は一に國家に在りて燃ゆるが如き、胸底の經綸を行はむが爲めなりき。彼が旅行は決して樂むにあらずして寧ろ苦しかりき。今彼が初旅とも云ふべき江戸旅行に於て如何に沿道の光景が彼の耳目を聳動せしかを見よ。

彼は藩費時習館の秀才として、夙に家老長岡監物の爲めに愛せられしが、彼は此の伯樂の推薦によりて藩主より特に江戸遊學を命ぜられ、且つ天下の大勢を視察

することを内諭せらる、彼の得意知るべき也。彼は發するに臨み吟じて曰く、

脱將十歲檢繩身、一笑瓢然東海雲、白水灘聲侵耳冷、龍山花氣撲衣薰、觀風聊抱吳兒志、講學何求商也、文目送飛鷹搏萬里、拂披双翼已離群、

彼れが飄然として東海の雲路に上りたる時や、眞に十歲檢繩の身を脱せるの思ありしならむ、而して此の旅の目的は觀風以て吳兒の志を果さむが爲めにして、講學徒らに商也の文を求むに非ざりし也。

然れども其二重峰を過ぎるに當りては、遊士始めて行

路の難さを知る、即ち、

巨石當前如虎龍、其間櫻樹或蒼松、頑雲十里霏々雨、纔

到一峰更二峰、

斯くて彼は鶴崎より帆船に搭じ、周防播磨の二灘を過ぎて大阪に入る、

森江々外泊舟時、海面潮來月上遲、夜靜瀕聽杜鵑過、郷

心萬緒亂如絲、

周防二百里空洋、風得便時帆正颺、到得中央水雲界、東

天如恰望琉黃、

布帆朝出竈門關、幾隊浪魚跳波間、舟子說言前路穩、南

風容易到横山

寄生水烟狎沙鷗、
 蟹女可憐巧含羞、
 婚旆高懸良日定、
 贈將海鼠嫁隣舟、

播洋風穩曉雲晴、
 一帶淡州望裡橫、
 海面乍看孤島現、
 舟人指點吸川鯨、

沙明樹碧播州路、
 點々布帆破浪奔、
 一望淡阿天接水、
 萬雷吼處是鳴門、

臥看曲江水上樓、
 酒旗垂柳夕陽稠、
 人丸祠下潮千尺、
 直逐春風入攝州、

兵庫伊丹看過時、
 湊川何處水之涯、
 舟行偏恨不如意、
 遙

拜楠公入字碑

八首巧みに海程の旅行を描出す、
 然して郷心萬緒亂如
 絲より直逐春風入攝州に至りては、
 彼が旅情の如何ばかり變遷せるかを知るに足る。

大阪に入るや、
 彼は少しく其繁華なるに驚けるものゝ
 如し、曰く、

攀空高閣烟雲鎖、
 弄水畫船歌管譁、
 無月天輝錦燈夜、
 不春地簇紫街花、
 夕陽春處長江晚、
 四百八橋虹影斜、

然れども彼は徒らに繁華に眩惑するの赤毛布に非らず、
 彼は直ちに觀破せり、曰く、

仁德奠都王者地、豐公雄據霸圖城、金甌丹碧摩天峙、紫陌樓臺映水明、利密豪商罟海內、術窮侯伯寄蒼生、長紗悲憤非吾事、且把酒杯唱昌平、

彼は大阪の觀光を了へたるの後、直ちに淀河を遡りて伏見に至る、彼は伏見に於て如何なる感慨を起せる、

妖禳衝天日色曛、危城獨當百萬軍、拋將一死比鴻毛、要令世人知君臣、猛將勇士次第死、烏公一笑酒方醺、從容東向九拜死、忠勇名垂無窮聞、吾來弔古三月暮、桃花落盡柳絲紛、舉酒灑地醉魂魄、想像威神仰餘薰、君不見妖禳一掃四海清、昇平長唱麗年春、

と吟じ、彼は古英雄の幽魂を吊し、竊かに餘烈の加被力を以て天下の妖禳を一掃せむことを願ひたり、斯くて彼は逢阪山を打越へて琵琶湖畔に出て、旭將軍の古墳を過るや、彼は積年の宿論勃々として吻を衝き來り、遂に長歌を作りて其意を述べ、

議論自有天下公、持筆容易難折衷、嘗讀水府史、到旭將軍傳、叛臣之名被將軍、豈非以襲清住殿、此事從來不免責、唯見其心必非叛、將軍天資自木強、不好犯上、不好亂、奈何長於木曾山中野人樵夫手、朝弓夕馬武技慣、唯知平氏爲父讐、不知朝憲與冠辨、鼓判官是何者、却以好亂

招狂煽將軍所恨此等人豈狹賊心忘帝眷北條氏竄三
皇足利氏叛醍皇此輩何以免天誅將軍何以受惡名商
量彼是失權度不見心跡有重輕久爲將軍欲雪冤今日
來謁不能忍世間別有公論否肯作長歌述不敏、

嗚呼千歳の前未だ曾て義仲の冤を雪ぐものなく千歳
の後始めて此の知己を得たり蓋し義仲の靈や地下に
冥すべし。

遙かに比良比叡の翠微を顧み巍然として天に聳つ彦
根城下を過り關ヶ原の古戰場を吊し彼は一夜東海道
石部の驛に宿り偶々客舎の壁上に亡父横井大平の名

刺を見る嗚呼是れ眞に奇遇遊子の感慨如何なりしぞ

疾痛誰呼久抱愁孤兒豈計向東遊偶然旅舍拜名札淚
滴衣襟不可收

唯夢有時接嚴顏每看遺物淚潛々十年旅舍拜名札堂
上眞如叱驚頭

二首皆な血涙の文字誠に卒讀に堪へざる也。

かくて彼は參河に來り桶狭間の古塚を吊ひ遠江灘を
望みて轉た激浪の壯快なるを賞し駿河に入りて富嶽
雲表に聳ち衆山皆な之れに朝宗するの大觀を嘆稱し
遂に崎嶇なる函嶺を踰えて大江戸に入る函嶺の詩に

曰く、

八里函關路雨絲灑笠簑林冥穿樹去天近踏雲過湖有
神魚躍谷皆山鬼窠真知行役苦奇險奈吾何
彼は江戸に着するや大儒名士の間に交遊し殆ど寧日
なかりき。



三 ペートル大帝と外國旅行

(Peter the Great and Foreign travel)

四百年前の昔寒互不毛の地に據りて蒙味蠢愚の民を
擁き國勢微々として振はず常に剽悍なる蒙古人種に
征服せられ三たび莫斯科府を焚かれ荒廢殆んど蘇息
に遑なかりし露帝國今や歐亞大陸に其脊梁を横へ領
域の曠大宇内に冠絶し陸には百萬の貔貅を養ひ海に
は數百の縹艦を浮べ鵬翼一搏既に歐洲先進の諸列國
を凌駕し更に爪牙を我が東亞に展べ虎視耽々として
吞噬を擅にせんとするに至る蓋し曠古の豪傑ペートル

ル大帝が卓然獨踞歐洲先進の諸國に歴遊し身を挺じて諸種の文明事業を學び、其克く建國創業の功を立てたるにあらずして何ぞ。

請ふ少しくペートル大帝の漫遊一班を叙せしめよ

○漫遊の目的

ペートル百事荒廢の後を享けて帝位に即く、自國の貧窶疲弊の狀、領域我より狭小なる隣國瑞典にも若かさるを目睹し、夙に開國進取の政策を布き内地の鑛山を開鑿し、印刷出版の業を盛にして國民教育を保護し、銃砲を鑄造し、兵卒を教練し、造船航海術を獎勵して海軍

の強大を企圖したりき、而も積年壓制の鞭下に全く智識の途を杜されたる露國人民中、是等の業務に應ずる適當の職工なきは勿論、さりとて此種夥多の職工を一々外國より備聘せむには久しく空乏に苦める國費の到底之れを支吾する所にあらず、是に於てペートルは一計を案じ、寧ろ自國の秀才を選抜し外國に留學せしめ、各々専門の學術技藝に就き着々完全なる教師及び職工を養成せしめんと欲し、前後數回の留學生を諸外國に派遣したり、然るに此等留學生の多くは外國語に熟達せざる爲め教授の言語の聽取れずして充分に研

究する能はざるあり、或は遊惰放逸に流れ貴重の學資を私慾に消費するものあり、或は外國の風土に慣れず不治の病にかゝり中途學を廢して歸國するものあり、竟にペートルの囑望せる計畫は満足なる効果を奏せずして露國は依然貧弱野蠻の舊套を被ふるの不幸を視んとす、ペートルは計畫徒らに頓挫し憂國の情措く能はざるの極、豁然覺る所あり、猛然親ら起て歐洲諸國を遊歴し、外國の名工技術家を雇ひて之を本國に送り之れに托して職工を養成せしめ、且つ自ら外國職工に伍して製鐵造船の術及び製紙等の文明事業を研究せ

むと欲し、茲に萬乘の身を以て外國遠遊の途に上る。

○出立

かくてペートル急に外國週遊の途に上らんと欲し、一日群臣を集め之に説て曰く、

朕不肖にして萬乘の位を享け而も治國の道を知らず、夙夜之を思ふて寢食甚だ安からず、糞きに軫念畫策するところ皆な水泡に歸す、蓋し人に依つて事を成さむと欲すればなり、自今朕親ら外國に巡遊し、大に得る所あらんと欲す、且らく卿等に托するに、莫斯科及び全國の政治を以てす、卿等夫れ朕に代りて其

緩急を誤る勿れ。

と意外の論言、群臣周章皆争ふて之れを諫む、モスコイの市民また帝王の身を輕んじて遠遊の途に上るを慨し、是れ回々教徒の深く宮中に入り我が帝王を欺きて之を外國に誘拐するものなりとして頻りに遠遊の決心を翻さむとせり、然れども今やペートルの決心は鐵よりも堅し遂に市民の怨望を耳にも懸けず、また群臣の諫言を斥けて容れざりき。是に於てペートルは政權を擧げて貴族、レフキリワイチ及びナルイシキンの二人に委ね、ポリスコキセイ侯をモスコイ市長に任し、

以て不在中の國事を掌らしめ、更にレポルトを以て露國特派大使と爲し、ペートル自ら微服して其從者の一員に加はり、一行二百有餘名、遂にモスコイを旅立ちぬ。

○リガに入る

ペートルの一行は途上ポーランドを過り、リガに到着す。ペートルは日に從者を伴ひて、市街を徜徉し、各種の製造場を巡視して、其内部の事情を探究し、外人に遇へば必ず種々の質問を試み如何にして蒙味の民を文明に導き得べきやを研究し、或は兵營砲臺火藥庫等を視察して大に新智識を得たり、かくてリガに滞留するこ

と一週日。

○獨逸に入る

一行は更に進んで獨逸のゲニクスベロクに入る、市街の逍遙人情風俗の變遷各種事業の視察、ペートルの研究思想は到るところに新奇を感ぜざるはなかりき、然るに普魯西亞國王はレポルトの一行にペートルあるを聞知せしかば直ちに使者を遣して其實否を問はしむ、ペートル已むを得ず夜半密かに王宮を訪ふ、普王大に之れを悦び款待意を盡してペートルの客魂を慰す、獨逸に在ること一月餘。

○噠馬に入る

ペートルは獨逸を去りて、噠馬のユツペンヘーゲンに入るや微行愈々人目を避くと雖も、學校病院及び兵營を巡覽し、孜々として研究調査に従事すること前日の如し、然れども今や彼の最も熱心に視察せんと欲するは海軍にあり、然るに當地には著名なる造船場なきが故に、更に和蘭に赴き、大に海軍國に於ける造船の實況を目撃し、且つ自ら職工に伍して其技術を研究せむことを決心し、乃ちレポルト以下の隨行者をば悉く噠馬に駐め、親ら唯六名の從者を携へて、和蘭アムスターダ

ム府に赴く。

○和蘭に入る

當時和蘭國は西歐最も強盛なる海軍國として海上の覇權を握り、續々老練なる航海者を出し、且つ造船製鐵の模範國として夥多の職工を諸外國に供給するの有様なりければ、國內の機關皆な新奇活潑にして、智識を求るに汲々たるペートルは恰も舊世界より新世界に入るが如く感じける。途上曾てモスコイにて使役せし鍛工キストなるものに奇遇せるを以て、ペートルは密かに告ぐるに實を以てし堅く來遊を秘せしめ、且つ暫

時其家に寄寓せむことを依頼せり、キスト喜び之れを迎ひ、室を清めて寢食に給待し、日々自から案内者となりて市街を徘徊し勤めてペートルの研究視察の便宜を與ふ。ペートルは大にキストの忠實を嘉し、身は一個の旅行者として視察の自由を得、ペートルは運河縱横市街を通し各國の商船之れに上下し沿岸到る處造船場及び各種の製造所軒を並べ、市民遑々として奔勞に暇なきの光景を見、深く商工業の隆盛なるに賞嘆し、遂に自ら造船術を實習せんと決し其意をキストに圖る。キスト乃ち大造船所の主人リストなる者に紹介し、名

をミカエルと偽り、爰に初めて其職工と爲るを得たり、ペートル性來、力人に勝れ且つ手工に特技を有し、勤勞敢て普通の職工に譲らざりしかば、幾程もなく主人リストの愛顧を蒙り、技術研究の上に於て大に便宜を得るの身となりたりしが、其の平常の行動往々にして世人の怪訝を招ぐことあり、或は一職工の身として三百ルーブルの大金を抛ちて一葉舟を購ふが如き、或は毎朝必ず壯嚴なる官服を着けたる露國官人の訪問を受け、談話應接の狀恰も其主長なるが如き、此の不思議なる職工に關するの風説は一時全國市人の話柄とは

なりぬ、和蘭官廳また之れを聞し遂にキストの宅に就き之れを査す、キストは飽まで然諾を重じ、彼は露國の木工ミカエルなる者なりと答ふ、然れどもキストの妻は之を隱匿するに忍びず、遂に露國皇帝ペートルなるを公言す、是に於てか全市民の知る所となり、且つ蘭國政府の優待を受くるに至れるを以て、また前日の如く市街を徘徊し工場に出入する能はざりき、境遇既に斯の如くなるに拘はらず、ペートルは尙ほ潛心研究を繼續し、更に東印度會社長の承諾を得て再び其造船所の職工と爲り、専ら謙遜辭讓を尙ひ、痛く他職工の尊敬を

拒絶し、遂に此地に於て自から「セントペートル」號と稱する一船を作れり。ペートル茲に留る數月、晝は造船所の職工として勞役を執り、夜は旅館に歸りて遙かに自國の政治を閲し、更に和蘭政府に約して造船職工及び百般の技士二百餘名を雇ひ之れを本國に派遣するなど、殆ど寧日なかりき。

○英國に入る

今やペートルは和蘭に於ける事業の一般を自得せり、彼は更に海に航して新文明國英國に渡り、普ねく諸種の事業を視察せんと欲し、再びレポルト等を蘭國に駐

め單身英國に乗込み、彼は倫敦に入るに先だちて奢侈の生活却て目的を失はむことを恐れたるを以て、豫め英政府に一個人としての待遇を求めたりしが、英政府は彼の爲めに窃に壯嚴なる住居を與へ、英王また屢彼を饗應し、且つ彼が英國に滞在中の費用は悉く之れを支辨せられたりき。ペートルは日々砲臺の武器造幣局の貨幣、國會の議事堂演劇の景况、大學の組織等を點檢し、或は英國海軍の制度、軍艦商船の製造術等を調査し、或は倫敦附近に點在せる名所舊跡を採見し、轉々耳目の壯快を感じたり、彼は英政府の優待をうくるにも拘

はらず、自から務めて身の尊嚴を隠匿し、時に身を製紙所、鋸木所の職人となり、時にまた製陶所の工人となり、尙ほ其餘暇を以て數學航海學及び解剖學を研究せりといふ。かくてペートルは調査研究略ぼ知得せる後、更に英政府に請ふて航海者及び技術者五百餘名を雇聘し、之を伴ふて英國を辭し、蘭國に駐留せるレポルトの一行と相合し、遂に奥國ウエンチ府を過ぎりて、露國に歸る。

○旅中の逸話

ペートル、噠國コツベンヘトゲンに滞在する一日、獨り

微服して市街を散歩せる折柄、途上美目盛粧せる貴婦人の腰間に金玉燦然たる時計を携ふるを見るや、彼れ大に之を怪み、直に貴婦人の前に進み、默然其時計を手にし、稍且く之を凝視して去れりといふ。

また一日、王室の高官らしき男、フランス風の假髪を被れるを見るや、彼れは最と不思議さうに之れを詠め居りしが、突然無禮にも其官人の假髪を剃去り、之れを諦視せるのち、之を路傍に擲ち、カラ／＼笑ひ去れりと云ふ。

ペートル職工として蘭人キストの造船所に在るの頃、

一日工場より退きキストの寓舎に歸らむとするや、途上の雑沓を避くる爲め、彼は路を狹隘なる町筋を取り梅子を買ひ、之を食ひつゝ歩み來りしに、貧民の兒等頻りに梅子を分與せむことを求む、彼は喰し残れる梅子を分與せしに、其數あまりに少く、凡ての兒等を満足せしむる能はざりしかば、却て兒等の爲めに嘲りを受け、果ては土塊を投ぜらるゝに至り、彼はホー／＼の杖にて我が寓舎に歸れりといふ。



四 林子平と諸國旅行

(Rin-shei and Universal travel)

徳川二百有餘年の覇業漸く衰ひ、内は綱紀弛びて士氣振はず、外は歐米の諸強國、萬里破浪の鐵艦を浮べ來りて四邊を壓す、蠹蝕の朽樹斧斤之れを伐り、風雨また將に到らむとするの狀勢なりき。此時に當り、密かに海外の大氣を吞吐し、夙に國防の新説を喝道し、邦家を寄浮孤懸の間に拯ひたる、是れ千古の獨見家、六無齋、林子平にあらずや。而して彼は貧窮自ら甘んじ、獨り江湖の布衣を以て任じ、孤劍短屐、四方に歴遊し、その足跡殆

ど天下に遍く、北は深く北海の雪に踏み入り、西は遙かに長崎の地に及ぶ、その行くや、輿に乗らず、馬に跨らず、草鞋を穿たず、唯それ墨斗を腰にし、高履を穿ちたるまゝ、千里の旅行なほ隣りに來往するが如き、今日陸に馳する汽車、海に走る汽船の便利あるにも拘はらず、猶且つ間里の外一步を踏出す能はざるものをして、洵に其の神足鬼脚に驚嘆せしむるに餘りあり、彼將た旅行に就いて如何なる趣味をか抱ける。

彼は常に讀書生に向つて諭して曰く、
書を讀む可なり、然れども足跡天下に遍き者にして、

讀書も亦以て用を爲すに足れり、卿輩足未だ里間を出でず、萬卷を讀破するも、竟に何の用をか爲さむ。
と何ぞ其語の豪宕なる、然れども人に教ゆるもの必ずしも其言の如く、其身に行ふものにあらず、而も子平の如きは其言の壯快なるよりは寧ろ其行に於て壯快なる實歴を遺せる人なりき。蓋し彼が當時政界の獨見家として、千古未發の知見を與へ、其能く彼を活動せしめたるは、其の幾分は之れを讀書堆裏より感得せしものもあらむ、また之れを先輩知己の談論より自得したるものもあらむ、然れども偽りなく、彼の頭腦を解剖せば

彼が旅行と漫遊とによりて實際に視察し來りたる思想知見最も深く刻めるならむ。

彼が旅行は實に彼の無言の師なりき。

彼は短旅行にも長旅行にも決して躊躇其日に移すものにあらず彼は思立つ日を吉日として直ちに發足する也。彼は人の如く旅費の心配もせず彼は人の如く旅装の準備もせず何時も高履を穿きたるまゝ、恰も隣里に往くが如く、風餐露宿更に意に介せざりき。彼の寶曆十三年五月江戸旅行に上りたる如き、以て見るべし。彼れ一日仙臺城の南長町橋の畔に釣す、適ま橋上を過

ぐるの旅客互ひに朝鮮使臣來聘の事を語り往くあり、彼は之れを傾聽するや久しく胸裡に鬱結せる對外的思想は勃々として禁ずる能はず、卒爾旅客に問ふて曰はく、朝鮮使臣の還へる何れの日ぞ、曰く旬日を出でざるべしと、彼は之れを聞くや決然として起ち家に歸るの暇なく直ちに釣竿を投じたるまゝ、即時星馳して江戸に赴く、其決斷の神速なる彼の英國ウイリントン將軍が、『或人の將軍は何時頃佛都巴里に赴くや』に答へて、曰く『只今』と速斷せるに比して實に好一對の美談ならずや。

仙臺は江戸を去る百里弱而も子平の眼より之れを觀れば尙ほ隣里のみ故に彼は此間を往復せる幾十回なるを知らず飄然として去り倏忽として來る。其健脚なる推して知るべし。或は傳ふ子平非常の健歩にて仙臺より江戸に至る僅かに三日間にて達せりと蓋し此の如きの急行は彼れ子平に於ても決して尋常の旅行にあらざりしなるべし。

彼は江湖の布衣を以て自任す故に郷里仙臺に在るも別に居室を飾るの什器家具なく四壁蕭條の間殆んど借物を以て住せり今ま彼が安永年間に於ける蝦夷旅

行に際し其發するに臨んで藤塚式部なるものに與へたる一書を見るに、

又遠島邊へ渡り候に付借用の書とも鍋と一同に返還仕候歸仙後又々借用仕候、

斷篇零墨亦以て彼が平素如何なる境遇に甘ぜるを知ると共に、彼が旅行に對するの如何に用意周到なりしかを知るに足るべし。

旅行家としての子平は如何に星馳急行の旅行にもせよ、彼は旅中の情況に於て決して忽にせざるなり、彼が眼は常に途上の瑣事にも注意せり、彼の耳は常に巷間

の童謠にも傾聴せられたり、今ま彼が安平二年に江戸に旅せる道中日記を見るに

道とをみ獨りたびねのすべをなみ

馬子らと歌ひくぐらしつ

彼は無學文盲の馬子の談話をも空耳に付せざりし也。

逢ふてうれしさ別れのつらさ

いつそ逢はぬが増しぢやいな

こひしやこひし我が故里の

芝の庵がなつかしや

彼は旅中歌ひゆく里謠を聞き、且らく其調をかりて旅

情を慰めたるものにあらずや

彼の孤劍單屐深く北海不毛の野に入り、夙に北門の鎖鑰に眼を注ぎたる安永元年の蝦夷旅行の如き、その旅中の觀察は他日三國通覽の一書となりて、當時上下の耳目を聳動したる幾許ぞや。

更に彼れが海外の風潮を候察して海防の長策を建てむと欲し、長崎に遊ぶ前後三回、或は和蘭陀の馬術を問ふて騎馬飼育の法を發明し、或は東西兩球の圖を寫取して歐米列國の地理形勢を研究し、或は輿地名譯を著はし、諸藥異言を記しては刺的印、和蘭、南蠻の三語を對

考し、或は當時外人に應接するは國法の禁ずる所なりしにも拘はらず種々の手段を廻らして蘭人アレンヘートに就きて海外の形勢を問ひ、或は蘭船の構造を研究し、或は砲銃の製造を觀察し、遂に一生の魂魄を留めたる海國兵談の大著述に着手せるが如き、彼が旅行の彼の歴史に及せる影響は幾許ぞや、否、彼の旅行は實に我が帝國の爲めには預言者の旅行なりき。



五 マルチンルーテルと旅行

(Martin Ruter and Journey)

文藝復興と宗教改革とは近世史の始めに於ける二大現象なりき、而して宗教改革の爲めに天下の木鐸となり、教會の腐敗を澄清し且つ僧侶の弊風を矯正したるは實にマルチンルーテル其人にあらずや、然れども彼が如何に羅馬法皇と戦ひ如何に社會に奮れる群魔を降伏せるかを叙するは本書の目的にあらず、唯彼が旅行に就て如何なる趣味を有し其旅中の趣味によりて彼の本願たる宗教改革に對する醇勃の思想が如何に

慰藉舒暢せられしか、是れ我人の知らむと欲する所なるべし。

ルイナル自から其消息を記して曰く、

余は孤筇單歩して旅行する時の如く、未だ會つて我は我の主宰者として行住自在敢て外物の爲めに犯されず其克く獨立不羈の意思を満足せしむるものあるを見ず、旅行は誠に余れをして自ら余が思想を鼓舞發揮せしむるもの也。余が躰動くときは余が心も亦た従つて動き、時に愉快なる田舎茅屋の間を通り、時に洵美なる水光山色を眺め、暮旦常に一點汚れ

なき清純なる空気を呼吸しつゝ、往くを送り來るを迎ふ、其疲れたる時は、乃ち我意の欲する旅舎に投じ、一物の余れを煩すなく、又俗累の余を絆くなし、嗚呼、此時に於ける余が精神の快樂何物か之れに如かん、余が心は海の如く濶く、余が思想は天の如く空し、余は百萬の大敵をも懼れざる大膽者とはなれり、余は宇宙萬物を主裁するの大皇帝かと思へり。余の心は見るに隨ひ聞くに隨ひ、觸るゝに隨ひ、接するに隨ひ、物より物に變遷し、恰も花に移る蝴蝶の如く動ひて止まず、而して思想の去來するは我より強ゆるに非

ずして彼が好む儘にせり。即ち思想は余が命ずるに
 従ひ活動するに非ずして彼が欲する所に従ひて活
 動するなり。余は唯だ飢へたる時に於ては食せむこ
 とを思ひ食し畢れば又た歩せむことを思ふ。かくて
 余が眼前には始終新たなる天國あるが如く、余は日
 々之れを求め、之れを求むる爲めに常に急がるゝ心
 地ぞする。



六 池大雅堂と修學旅行

(Ike-taigado and excursion)

天地は沈黙なり、秘密なり、春は花咲き夏茂り秋飛び冬
 枯るゝ、一庭樹既に然り、沈黙の變化、秘密の活動、無聲の
 聲、無色の色、宇宙は隈なく此の不可思議なる現象を以
 て満さる。然れども天然は正直に人の問ふ通りに應ふ、
 故に地質學者の眼は常に地質に注がるゝを以て、名も
 なき石にも造化の大工を悟り、植物學者は心常に植物
 に精注するを以て人の注意せざる野草よりして未曾
 有の發見を爲し、天文學者は其思想常に天に向ふを以

て人の見ざる星までも發見して益々宇宙の天工の深遠なる事を解す、而も沈黙は深遠にして、秘密は永劫なり、故に如何なる大手腕を有する美術家も、人物の美妙なる所に至りては、其キャンワスの上に畫く能はず、又景色の尤も微妙幽雅なるものに至ては嘗て之を描き出したるものなし、詩人然り、文人また然り、嗚呼、渠の一代の畫弊を磨ぎて一舉之れが改革の衝に當り、名は其畫きたる富嶽と共に高く、行は俗氣を離れたる理想と共に清く、今尙ほ南宗畫家の泰斗として尊重せらるゝ池大雅堂の如き、此の沈黙の變化を捉へ、秘密の活動を

描かむと欲し、如何に天然と戦ひしぞ、彼れが半肩の行李を擔ひて漫遊の途に上りたる、即ち彼が戰場に赴く所以にして、其の旅行記は即ち彼が戰鬥史にあらずや。

彼は十年丹青の功を積みども親しく天然の大觀に接觸せざれば、亦是れ南宗派中の一畫人に終れるを知る、天才豈に此る單調平凡の生涯に忍びんや、彼は如何にもして天然の沈黙を觀破し、自然の秘密を闡明せむことを希へり、彼は此の宿望を果さむが爲めに幾度か日本國中の漫遊を思ひ立ちし也、然れども彼は一家の主

人として種々の俗累係累に纏綿せられ、容易に彼の出遊を許されざりき、彼は恰も籠中の鳥の徒らに碧落を望んで飛び出す能はざる如く、猛獸の檻中に鎖されて空しく深山の巢窟を思ふが如く、鬱々怏々として樂しまざりし也。寛延二年彼齡漸く二十七、彼は此夏遊心勃々として禁ずる能はず、遂に一家の萬累を抛擲し、決然として旅程に上る。

彼は眞葛が原の草堂を出づるや、一直線に東海道を指して下れり、琵琶湖の波光比良比叡の山色、彼は早くも畫囊中に收め、更に一路の馬蹄を趁ふて鈴鹿嶺の嶮を

越へ、筆捨山の奇に驚き、關驛の東に聳えたる錫杖ヶ嶽の姿を仰ぎ、四日市名古屋を過ぎて、宮の七里の渡に夕日の影の花やかなるを喜び、岡崎より進んで遠州の濱松へと行けり、途上往々舞阪の奇勝を賞し、濱名の帆影をながめ、かくて天龍川の奔流を顧みて、駿州に入る、左は薩領、右は豆洋、前頭露出玉芙蓉、彼は遙かに之れを眺めつゝ、雲煙の變化と色彩の濃淡とを深く心に刻み、興津、岩淵次第に足を進むるに随つて、富嶽の清容は漸く偉大にして變化また極りなし、ある時は雲半晴れて晴翠滴らんとするが如き半面を顯はし、ある時は八面玲

瓏玉を以て造れる如き清姿を顯し、ある時は雲影暗く
 全山を蔽ひて纒かに長き麓の裾を出したる光景を呈
 し、ある時は晴嵐一碧横さまに半腰をかすめて旗雲揚
 々として絶巔に靡ける奇景を呈し、千態萬狀殆んど名
 状すべからず、彼は山麓に滞在すること十數日、種々の
 方向より此等の變化奇觀を研究したるのち、彼は更に
 山靈に謁し、異卉珍木奇巖怪石眼に入るもの悉く取て
 畫囊に收め、果ては絶巔に攀ち上り眺望の變化を端倪
 し、畫法筆意の髓を極めむと欲し、彼は大宮郷の正面よ
 り、徐々として登り始め、一級二級、顧みれば駿河灣水

盤の如く帆影鷺に似たり、三級四級、顧みれば渺々たる
 豆洋の海岸線は尙ほ弓弦の如く、遠山近山、恰も薄墨を
 以て刷きたるにも似たり、五級六級、瞰下せば八州の野
 は蜃氣樓の如く、奥羽の山々一髮の如し、かくて彼は級
 々相上り、漸くにして其絶巔に立つや、四顧茫茫として
 夢の如く、走るものは唯雲、靡けるものは唯霧、彼は杳と
 して我れ我れを忘る。
 大雅は擅まに畫神を驚かせるのち、山を下り、原驛の一
 旅亭に投ず。今や深く富嶽の山雪に同化せられたる
 彼は魂なほ山巔に止まりて、夢寐甚だ安からず、夜半枕

と向へり、時恰も九月上旬、そよ吹く秋風は徒らに客衣を拂ひ、鳴き渡る雁聲うたゝ歸心を催さしむ、彼は一簣一笠孤影蕭々として獨り書神に依て慰められつ、時に那須野ヶ原を横断しては尾花の風にそよげる光景をながめ、時に白川の古關を過りて吹く秋風の一入淋しきを感じ、かくて彼は福島郡山、鹽釜、つぼの石、奥の細道たどり、く、東奥の名勝松島の畔に着きにける。見渡せば潮に圍まれたる島の數々、松の翠濃やかに枝葉汐風に吹撓めて、欲つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ひ、或は二重にかさなり、三重にたゝみて左にわか

れ右に連なる景勝、まだ見ぬ洞庭の湖も之れに勝るべき、聞く昔し一代の俳聖芭蕉をして口を緘めて三嘆せしめたるも宜なりとぞ嘆賞せり。かくて彼は松島の奇勝をも残りなく書囊に收め、一路直ちに歸京の途に上れり。

嗚呼此の長き漫遊に於て、彼は如何なる利益を得たるか、而して此の旅行間に於て練り鍛へたる彼の書神は如何に丹青の上に活躍せしか、その寫實の上に於て、其氣韻の上に於て、漸く沈黙の變化秘密の活動を發揮し來りたるは多くは此の漫遊以後の作物なりと云ふに

頭を見廻はすや、恰も好し六枚折の屏風新に絹を張られたるあり、彼は思はず躍ね起けり、彼は幾度となく屏風の前に立ち幾度となくまた坐に戻る、彼は躊躇せり、然れども、彼は此儘に眠る能はず、遂に傍なる床の間にありし硯箱を引寄せ、彼は屏風に立はだかりたるまゝ、墨痕一揮、絶大なる富嶽は書き出されたり、かくて彼は稍書神を慰むるとを得、また竊かに臥床に入りしが、明朝旅亭の主人に見咎められむことを懼れ、其翌家人の起きざる内に朝飯も食はず、此旅亭を辭せりと云ふ、彼は富士山下に此の好逸話を遺し、道を急ぎて箱根の險

に入り且らく芦の湖の波光を賞し、小田原驛を過りて茲に古歴史の跡を忍び、一路遙々として江戸に入りしは恰も其年の八月下旬、彼は是に於て徳川覇府の隆盛を見更に郊外に逍遙して武藏野の面影を想像せり、斯くの如く彼は到るところに書神を慰め、一鳥の飛ぶ、一芦の折れたる、彼は得るに隨て之れを書囊に收めき。頭を回せば遙けくも來つるものかな、家人は日に其歸りを待ち暮らしつらん、囊中の物また輕さを覺へ初めたり、此地より歸るべきか、否、機會は得難し、此行また容易に再びすべからず、彼は決然として更に奥州松島へ

と向へり、時恰も九月上旬、そよ吹く秋風は徒らに、客衣を拂ひ、鳴き渡る雁聲うたゝ、歸心を催さしむ、彼は一簣一笠孤影、蕭々として、獨り畫神に依て慰められつ、時に那須野ヶ原を横斷しては、尾花の風にそよげる光景をながめ、時に白川の古關を過りて、吹く秋風の一入淋しきを感じ、かくて彼は福島郡山、鹽釜、つぼの石、奥の細道たどり、く、て、東奥の名勝松島の畔に着きにける。見渡せば、潮に圍まれたる島の數々、松の翠濃やかに、枝葉汐風に吹撓めて、欬つものは、天を指し伏すものは、波に匍匐ひ、或は二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわか

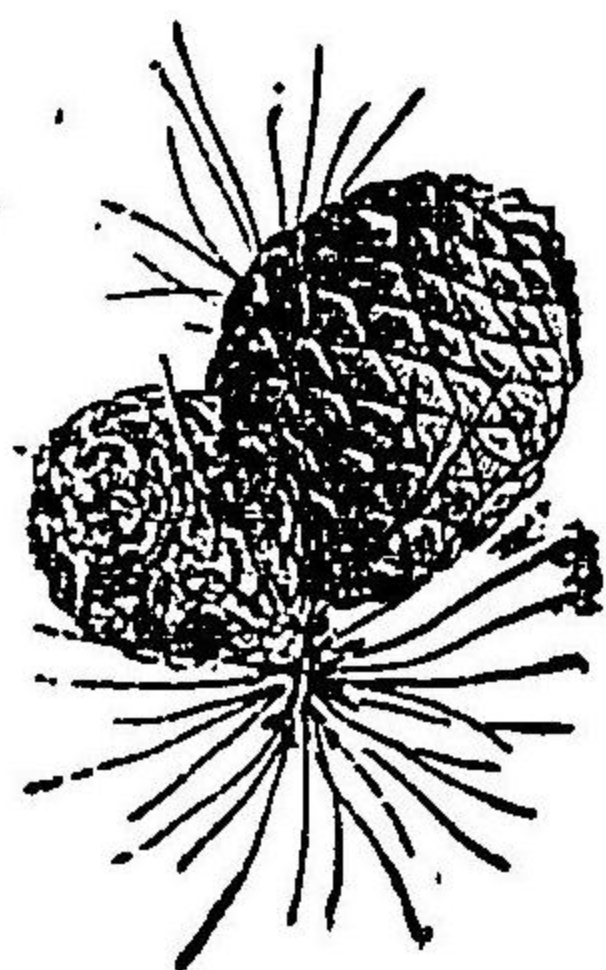
れ、右に連なる景勝、まだ見ぬ洞庭の湖も、之れに勝るべき、聞く昔し一代の俳聖芭蕉をして、口を緘めて三嘆せしめたるも、宜なりとぞ嘆賞せり。かくて彼は松島の奇勝をも残りなく、畫囊に收め、一路直ちに歸京の途に上れり。

嗚呼、此の長き漫遊に於て、彼は如何なる利益を得たるか、而して此の旅行間に於て、練り鍛へたる彼の畫神は、如何に丹青の上に活躍せしか、その寫實の上に於て、其氣韻の上に於て、漸く沈黙の變化秘密の活動を發揮し、來りたるは多くは、此の漫遊以後の作物なりと云ふに

あらずや。

著者曰く、大雅は此の漫遊の後、頓に旅行の趣味を得たるものにや、旅行癖の就きたると云ふものにや、將た資産も幾分か餘裕の出来たるものにや、年として旅行を缺きしことなし、而して寶曆十年に於ける北陸漫遊の如きは、實に此の漫遊に次げるの大旅行なりしが、而も歩を江戸に止められたりき、彼は全國到處に鞋を入れざるなし、彼は普ねく名山大川を觀たり、然れども彼は胸中に磅礴せる畫神と氣韻とを發揮する爲めに特に富士山を擇べるものゝ如し、彼は

富士の山靈に謁すること前後三回に及べりといふ。



七 ゲーテと旅行

(Goethe and Journey)

ホーマーが古代の思想を代表し、ダンテが中古の思想を代表し、セークスピアが文藝復興時代の精神を代表せる如く、實に近世の思想を代表せられたる獨逸文星ゲーテ、彼れまた旅行好きの文士なりき、彼の年表を閲するに、千七百七十五年十一月の瑞西旅行、千七百七十七年の末より千七百八十年の始に至るまでの四年間漫遊及び千七百八十六年九月より千七百八十八年四月までの以太利旅行の如きは、彼の旅行として最も

人口に膾炙せるものなり、而して此等の旅行に關し彼は如何なる動機原因に觸れて發足せしか、將た彼は此等の旅行によりて如何なる趣味を感じ如何なる影響を彼の作品に及ぼせしか。

○瑞西旅行

千七百七十四年の十二月頃、ゲーテ尙ほ新進作家としてフラクフルト市に在るや、當市の一銀行家の女にリ、セーテマンと稱する處女ありき、芳紀方さに十六、容姿頗る艷麗、紅圍翠帳の裡に人と成り、嬌態婀娜として海棠の雨を帶ぶるが如く、細腰纖手、娟々として尙ほ風に

堪へざるに似たり、ゲーテの熱情は忽ち此の婀娜に向つて瀧がれたり、リリ嬢も亦ゲーテを愛し、ゲーテは日々嬢を訪ひ、銀色金光燦爛たる深閨に喃喃として情思を語るに至る、ゲーテがリリに對する愛、リリがゲーテに對する戀、戀愛相思の情、千秋萬古相變らざらむことを希へりしにも拘はらず、狂風花を散らし、妬雲月を蔽ひ、ゲーテの父はリリを以て淫奔多情の嬌娘と爲して之を喜ばず、リリの母はゲーテ資産の甚だ乏しきを見て愛嬢を妻はすを好まず、ゲーテの友人も亦リリと一生を與にするの不可を説く、是に於てゲーテとリリは

四面楚歌の中に陥れり、嗚呼、明月の下落花の間、佳人才子相拉して將來を想ふの時、豈に情緒纏綿亂れざらんと欲するも得べけむや、多感多涙のゲーテは此に至りて全く煩悶憂鬱の裡に葬られたり、彼は如何にして此の苦痛を脱すべきや、滿腔の苦痛は遂に彼をフランクフルト市より逐ひ出せり、彼は此苦痛を忘るゝは唯だ夫れ旅行の一策あるのみと決せり、然れども彼は此際尙リリに戀々の情堪へ難く、其フランクフルトを發するの前夜、獨り私かにリリの門前に至れば、リリは方に樂を奏して宛轉たる嬌音徐るに、戸外に送り來り、花の

如き燈光は可憐なるリリを照らせるを見る、ゲーテ殆んど魂躍り魄飛ばむとせり、佇立多時、遂に決然として去り、其翌二人の友と共に、彼は無限の感慨を抱き、飄然として瑞西の山水郷に向ふ、かくて彼は朝に山容水態を品し、夕に風光の明媚なるを賞し、詩に寄せ、文を遣り、聊か以て其憂悶を忘るゝを得たり、ヘルツマイン、ヘルツ、ヴァス、ソル、ダス、ゲメン、ハイデン、レイスライン、エーレン、ミン、ウン、ド、エルシレ、クラウチ、フォン、ヴァイルラ、ベルラ等の短詩は實に彼が此の旅前後の無弦琴なるべし。

○千七百七十年の末より千七百八十年の

始に至る旅行

ゲーテ歳二十七、ヴァイマルのイルマ河畔に在るや、彼はヴァイマル公の知遇を受け、一時交際社會に翱翔するの身となりぬ、彼は忽ちに交際界の明星として、彼の身邊より發する光線は陸離として八方を照し、貴紳淑女皆な彼を愛せざるなし、彼は洵に交際家として、大魔力を有せり、其瀟洒たる風彩、其快活なる舉止は、苟も一度ゲーテを見るものをして其心を奪はれざるはなかりき、彼は飽まで此の秘訣を弄して、交際社會に活氣を

添へ、貴紳淑女に持囃されたり、曰く園遊會曰く假裝會曰く舞踏會、彼は招接者の筆頭として、孰れの宴會にも顔出しせざるはなかりき、且つ天高く馬肥ゆるの秋日には、彼は貴紳と共に山野に遊獵し、花笑ひ鳥歌ふの春日には、彼は貴嬢と與に馬を郊路に驅り、彼は此の交際場裡にまつはりて一日も寧靜ならざりき、然れども、イテは漸く豪興快遊に倦めり、彼は交際社會に博するは其目的にあらず、彼は一篇の詩を得るはなほ幾多の榮職を得るに勝る、是に於て彼はヴァイマルの交際社會を辭して遂に諸國漫遊の途に上る、千七百七

十七年十二月彼はハルツに至りて憂憤の厭世家アレツシングを慰め、翌年テスサウに遊んで其公園の善美を見て我がヴァイマル公園の改良を計畫し、其の翌年の末に至り、ヴァイマル公と共に瑞西漫遊の途に上り、途フランクフルトの故國に入り、双親を省み、ストラスブルヒを過ぎりて、昔日の情娘リリが既に他家に姻して一子を挙げたるを聞き、更にエムメンゲンに往いて愛妹フルチリアの墳墓を吊し、斯くてパーセルより瑞西に入り、擅まに山水の鍾靈を觀賞し、登臨以て胸中の蕪雜量頭を一掃し、斯くて千七百八十年一月ヴァ

イマルに歸る、ゲーテは此旅行によりて大いに高想妙思を發揮するを得たるを以て、歸來早々イルム河畔の幽屋に入り、門を閉ぢ客を辭してベルナルド傳を完璧し、且つ「タツソー」「ギルヘルム、ミインステン」等の諸作に着手せりといふ。

彼が解剖學、地質學、植物學等の科學的研究に従事せるも、此の旅行の頃なりと傳ふ。

○千七百八十六年の伊太利行

ヴァイマルに於けるゲーテは、交際場裡の花なるのみならず、また戀愛の花なりき、實にゲーテが交際に巧み

なると、辭令風采の秀でたるとは、ヴァイマル宮中に入する貴婦淑女をして惱殺せしめたり、中にもヴァイマル公の廐馬寮の男爵フォン、スタインの愛婦シャイロツテ夫人の如きは、年既に三十三、ゲーテより長ずること六年、思慮あり、教育あり、且つ七人の兒女を有せるにも拘はらず、深くゲーテの容色秀才に惑溺して、其婦徳を破るを顧みざりき、落花情あり、流水豈に意なからんや、ゲーテも亦シャイロツテの春色漸く深うして、妖艶頗る濃かに、且つ嬌喉能く謠ひ、宛轉能く舞ひ、輕快能く談り、人をして恍惚たらしむるものあるを見轉た

戀愛の情に堪へざりき、然るに男爵フオンスタインは多くは宮中に止まりて家に歸ること稀有なるが故に、ゲーテは之れを便として常にシヤイロツテを訪ひ、シヤイロツテは之を機としてゲーテを尋ぬ、イルム河畔緑林翠微の間、鳥聲喃々たる處、水聲潺々たる隈、男女手を携へて互ひに蜜の如き情思を語り、殆んど夕陽の西山に傾くを覺へざりき、然れども斯の如き惡徳汚交豈に永く延年の春を契るを得べき、ゲーテに對する非難の聲は徐々として交際場裡に起れり、蓋し彼が千七百七十七年より千七百八十年に於ける諸國漫遊を企て、

斷然豪遊放逸の交際社會を辭したるは、一は此等の醜聲を聞くを厭ひたると共に一は相互の行迹を窺まざむとしたるならん、然れどもゲーテとシヤイロツテとの情交は絶へざりしなり、惡縁綿々として情人の愛は幾度かゲーテが旅中の夢に入る、彼の形影は幾度かツアイマルに出沒せり、斯の如きもの殆んど十年の久しきに亘り、二人に對する嫉妬非難の聲は益す高く、今や相互の交情は快樂の境を越へて苦痛の界に入る、彼は日夜煩悶せり、彼が情緒は麻の如く糾れたり、惑亂煩悶の末、彼は驟然として悔悟せり、悔悟して始めて彼は光

明に觸れたり、嗚呼我は詩人なり、雄篇大作美名を千載の下に傳んには、我はシヤイロツテの愛を棄て、腐敗せるヴァオマルの空氣を離れ、別に高尚天真の新乾坤に逍遙せざるべからずと、是に於て彼は決然として起ち、オルム河畔の幽屋を出て、世人の注目を避けむがため、装を商人に扮し、名をミエルレルと改め、飄然として伊太利に向へたり、ゲーテは千古文明の源泉たる伊太利の古國に入るや、先づムニツヒに至りて、繪畫陳列館及び古物蒐集所を視、ガルダ湖畔を過ぎて、水光波色の澗激たるを賞し、ヴェロナを経て羅馬建築術に依りて建

てられたる圓形劇場の宏大壯麗なるに驚き、ヴィセンザに入りて、純粹なる「バラデオ」の優美にして風雅なるを嘆稱し、バヂユアに行き、美麗なる植物園を逍遙して、植物學に新智識を加へ、ヴェニスに來りて、其風俗の溫雅風流轉た人心を快うする者あるを愛し、フルララに進み、タツソに新趣向を添へ、ポログナに參して、幾多の老教授と會見し、フロレンスを經アスシに至りて、荒廢零類せる寺院を吊ふて、古代の技術を考へ、スポレトに至りて、上古の優美なる建築術を研究し、終に首府羅馬に達せり、彼は羅馬に淹留すると四閱月、而して此間

彼は畫家テイシユバインに就いて繪畫を學び、アンヂ
 リカ、カウフマン、モーリツツ等の日耳曼文藝家と交は
 りて技藝文學に新智識を得たり、斯くて彼は羅馬を辭
 してチーブルスに赴き、長汀曲浦、漁舟去來、江上有山、山
 遠近、波間無路、路縱橫の自然の大景に接して無上の快
 愉を感じたり、仰げばイトナ山は突兀として高く聳へ
 猛然として噴く黒烟は風に順つて長空に流るゝを顧
 みつゝ、彼はチーブルスより航してシシリ島に至り、山
 陵の起伏せる林邑の鬱然たる、人民の風俗、什器の形狀
 シシリ全島の風物宛然是れ「オテツセ」中に描き出さ

れたる希臘其者に似たるに驚き、彼は全島を逍遙して
 幾多の新觀念を發揮せり、彼のナウシカアの作は確か
 に此新觀念の寓意なりといふ。かくて彼はチーブル
 ス、シシリ旅行を了へ、更に羅馬に歸り、再び繪畫に熱
 中し、又「エグモント」作に従事し、其他尙ほ未定稿に屬せ
 る「エルヴイン、ウンド、エルシレ」及び「クラウヂチ、フォン、
 フィルラ、ベルラ」等の訂正にかゝれり、彼は此等作物の
 訂正完璧せるを期とし、遂に羅馬を發して故國ヴァイ
 マルの幽屋に還る、時に千七百八十八年四月、彼が歳既
 に四十九。

嗚呼彼れが此の二年有餘の長旅行は如何なる變化をか彼の思想に與へたる彼は技術觀に就いて曰く堂宇伽藍は假令ゴチック式の裝飾を附するも其の構造に於ては希臘式の寺院の如く鞏固と質素とを旨とせざるべからずと彼はまた人生觀に就いて曰く人間は良し風流優美なるも其胸中には常に高潔剛正凜平なる氣象を藏めざるべからずと。

彼の旅行は確かに彼に新生涯を與へたり。



ハ シェクスピアと出郷旅行

(Shakespeare and Journey)

旅行は誠に人生の運命を廻轉するの大旋機なり旅行は確かに滿腔の邪氣を拂拭して更に清新の思想を與ふるものなり旅行は實に陰鬱なる舊生涯を出て、愉快なる新生涯に入るの善巧方便なり英國の處女王イリザベス王朝の治下に於て古學復興の率先者として英國社會の思想界に一大革新を與へ文學王として今尙ほ後進の崇拜を享くる渠れシェクスピアの如き、その在世に於て旅行が如何に運命の曙光を彼に與へ

たりしか。彼の散逸せる傳記は到底詳細なる事實を知る能はずと雖も、彼は齡二十一歳に至るまでは唯夫れ故郷の山水に私淑し、愛婦アーンと共に父の家計を扶け、貧乏殆ど外遊に暇なく、ストラットフォードの天地に踟躕せる一個微弱の田舎文士たりしなり、而して彼の性質極めて謹慎なりしを以て、彼は夙に自家の天分に安じ、豫め放縱世に容れられざる詩人の腹肚を以て出遊を擅まにせば、徒らに辛酸を重ねて得る所少なきを知りしならむ、然れども自然の運命は彼をして永くストラットフォードに止まらしめず、彼は遂に旦夕

私淑せる故郷の山川に訣別を告ぐるの已むなきに至る、即ち彼の父の生計は頻年不幸の餘波を享け、シエクスピヤ一若夫婦の刻苦勞働するにも拘はらず、今は漸く困憊貧窮の極に陥り、些々たる金錢の貸借に關してまでも或は訴へ或は訴へらるゝに至り、餽飢彌縫債鬼を避んと務むる彼の父に對して、裁判所より財産差押の令狀は幾回となく發せられ、執達吏は來りて頻りに其命令を實行せんとす、家資は分散せられたり、彼は家名を再興せざるべからず、老父に奉養せざるべからず、最愛の妻子を養はざるべからず、彼は遂に意を決して

住み慣れたる故郷を去り未來の幸運を首府倫敦に求めむとせり、乃ち妻の兄パーロシエーに其意を語りて、且らく妻子を托し、雨は蕭々として征人の衣を打つ之時、彼は獨り筆硯を載せ、悄然として都の空を望んで旅立ちせり、嗚呼、絶世の天才、今や無限の感慨を抱き、風塵徒らに飛ぶ逆旅の人となる、而も此際に於ける彼の境遇より此の旅行を見れば、彼は蛟龍鼉鼉吞吐出沒の處尙ほ一條の脱路を見出せるの感ありしならむ、果して然り、彼は悲酸なる舊生涯は此旅行によりて都て過古の夢に屬し、新に愉快なる倫敦生活は此旅行により

て將ち來されぬ。

傳に云く、彼は倫敦に在る十八年、而も毎年必ず故郷なるストラットフォードに歸省したりきと、蓋し途上の往返、彼は轉々今昔の感に堪へざりしなるべし。



九 俳聖芭蕉と旅行

(Haise-Basho and Journey)

「雲とへだつ友かや雁のいさわかれ」との一句を詠み深く君とし師とし仕へまつれる蟬吟公の死を悼みて、故郷伊賀を去りてより、旅に病むて夢に枯野をかけ廻るの辭世を残り、大阪の客舎に於て入寂するに至るまで、「古池や蛙飛び込む水の音」の一碑は六十餘州到る處の芭蕉塚に建てられて芭蕉翁と云はゞ、磯打つ浪に貝拾ふ海士の兒より、落葉搔き集むる山賤の童に至るまで知らぬものなきほど、芭蕉の吟杖は日本全國遍ねく入

れられしなり、されば翁の歴史全般は殆ど羈旅を以て家とせる行脚の歴史にして、何時の旅行は翁に如何なる變化を與ひ、將た翁の俳想は何時の旅行より胚胎せしやなど吟味するは、寧ろ無用の記事なるべし。

彼は何れの行脚をも面白かりしなり、即ち彼が『笈の小文』に記して曰く「見る所花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし、像花にあらずる時は夷狄に等し、心月にあらずる時は鳥獸に類す、夷狄を出て鳥獸を離れ造化にしたがひ、造化にかへれ」といふは確かに彼れが旅行の趣味を流露せるものにあら

ずや。而して彼は此等の雅懷を成るべく多く發展し
 舒暢し感起せむが爲めに、人に家憲家例のある如く、彼
 は旅行家として行脚の掟なるものを作れり、曰く

○行脚之掟

- 一、ひとつ宿に故なきに再宿すべからず、樹下石上に
 臥すとも暖かなる席とおもふべし、
- 一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず、惣て物の命を取
 ることなかれ、
- 一、君父の讐ある處には門前にも遊ぶべからず、俱に
 天を戴かざる忍びざる情あればなり、

- 一、衣類器財相應にすべし、過ぎたるはよからず、足ら
 ざるもしからず、程あるべし、
- 一、魚鳥獸の肉を好んで喰ふべからず、美食珍味に耽
 ける人は他事にふれやすきものなり、菜根を咬み
 て百事をなすべき語を思ふべし、
- 一、人のもとめなきに己が句を出だすべからず、望を
 背くもしからず、問はざるに説くは説くにあらず、
 問ふに答へざるはよろしからず、
- 一、たとひ嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべから
 ず、起らば中途より歸るべし、

一馬駕籠にのること勿れ一枝の枯杖をおのれが瘦
 靡ともふべし、

一好むて酒を飲むべからず饗應により固辭しがた
 くとも微醺にして止むべし亂に及ばすの禁あり
 祀歳の戒祭にもろみを用ゐるも酔へるを憎みて
 なり酒に遠ざかるの訓あり慎めや、

一舟錢茶代忘るべからず、

一他の短を擧げて己が長をあらはす事なかれ人を
 誘つて己れにほこるは甚だいやし、

一俳談の外雑話すべからず雑話出でなば居眠りし

て勞をやしなふべし、

一女性を俳友に親しむべからず師にも弟子にも入
 らぬ事なり此道にしたしめば人を以て傳ふべし
 總て男女の道は嗣を立つるのみなり流蕩すれば
 心敦一ならず此道は主一無適にしてなす能く己
 れを省むべし、

一主あるものは一枝一草たりとも取るべからず山
 川江澤にも主ありつとめよや、

一山川舊跡したしく尋ね入るべし新たに私の名を
 付ける事なかれ、

一 一字の師恩たりとも忘るゝ事なかれ一句の理を
 だに解せず人の師となる事なかれ人に教ゆるは
 己れをなして後の事なり、
 一 一宿一飯の主もあろそかにももふべからずさり
 とて媚び諂らふ事なかれ如是の人は世の奴なり
 此道に入るものは此道に交はるべし、
 一 夕をおもひ旦を思ふべし旦暮の行脚といふ事は
 好まざることなり人に勞をかくることなかれ屢
 々すれば疎んぜらるゝを思ふべし、

十 グラッドストーンと伊太利旅行

(Grindstone and Italy travel)

具氏二十四歳の春、オックスフォード大學の業を卒る
 や、爰に且らく多年螢雪錐股の苦を忘れ、紅塵萬丈の境
 を脱して山川風月に嘯き、萬卷の書を胸裏に藏めて幽
 邃の溪谷に沈吟し、過去千萬の事實を取りて天地の詩
 卷に照らし、更に此の玄々裡より將來の樓臺を畫き出
 さむと欲し、今や千里家門を辭して遠く伊太利の古國
 に遊び、その邦語を學び、美術を觀、風光明媚の山川に逍
 遙せむとす、彼が此行如何ばかり愉快なりしぞ、蓋し具

氏の如きは能く勉め且つ能く樂しむものと謂ふべし。而して彼は伊太利に遊ぶ旅程の順序として先づ大陸に航し沿道歴々佛を看獨を經巴里伯林の觀光は謂ふまでもなく遂に彼は一意伊太利に入る。

伊太利はアルペン山の南長く地中海に斗出したる長靴形を成せる半島にして氣候暖かに南風薫ずる處葡萄長く垂れ橙樹繁れる處千古文明の痕を印して眞個に技藝文學の博物館なり都市到る處として優美の觀に富まざるなく羅馬の寺院見るとして輪煥宏壯ならざるなく山紫水明踏むとして風致と歴史とに富まざ

るなく恰も天然の繪畫をひろげたる如く名工の彫刻を蒐めたるが如し嗚呼彼は多年オックスフォードの書卷堆裏に在りて幾度か此の光景を夢想せしなるべし而も今や親しく此の絢爛の地を踏む知らず彼が胸中幾何の感慨を惹起せるかを。

かくて彼は伊太利の風光に浴し後ち直ちにシ、リ、島に達せり。

シ、リ、島は即ち長靴の底部伊太利の地勢を長靴形と假定すればに當れる孤島にして其昔希臘文明の策源地として此島より侵入せられたる程ありて今ま尙

ほ島民の人情風俗等に希臘時代の後影を留め居れりといふ。且つエトナの山巍然として其の上に聳へ海面を抜くこと直立五千尺山嶺雲外に突出し雲深くして看る可らずその崇高その靈怪壯士之を見て氣躍り、怯者之を望んで魂驚く亭々として雲霄を摩するの栗樹は恰も蛟龍の軀を擧げ波を出て土を蹴て山嶺に向けて走るが如し若し夫れ漸く深林を出れば茫々たる原野所々に散在し靈芝奇草こゝに簇生し群羊嬉々として青草を噛み牧童は野邊の暖さに眠る若し夫れ高さに登りて下界を望まんか地中海の波狂ひ潮踊りて大

洋の島を呑まんとするに似たり。實にシシリ島は桃源里中最も粹美の勝地にして具氏島内隈なく觀光せる後古來幾多の詩人をして三嘆口を緘ましめ幾多の畫伯をして靈腕を撫して筆を投ぜしめたるも無理ならずと感じける。具氏はシ、リ島に来るや暮旦エトナの崇高を望むて仰慕措く能はず然れども水光山色殆ど應接に遑あらざりしを以て且らく登臨を見合せ居たりしが今や高きに登りて有名なるエトナ火山の跡を一見せんとし從者を率ひて其途に就けり。則ちカタニアより坦

道を経て、ニコロニーの丘陵に登る時に遠雷の耳を打つが如きを覺ゆ、仰いで天の一方を望むに火山の巔よりボスコの方に亘り異狀の光を呈するを見る、從者告げて曰く是れ火山地方に多く見る所深く意とするに足らずと、更に歩を進めて森の陰を踏み迂回曲折して自然の公園を歩しイングレシに達せしときは日既に没して濃霧山を罩め、寒暖計は遽に三十度に下る、この時從者又具氏に謂て曰く、山上第一の絶景は朝暾の將に上らんとする時にあり、請ふ夜を犯して進まんと氏即ちその議に従ひ暫く道傍の民家に息ひ、時を計り

て出づ蓋し山巔にて夜の明けんとを期するなり、則ち共に暗き徑路を辿り、漸く歩して山腹に至る、強漢數人あり、路傍に火を焚きその周圍に團樂す、具氏以爲らく是れ盜賊追刺の徒ならんと、則ち心を定めて其の前を通過す、強漢敢て誰何せず、登ること數丁、具氏之を從者に問ふ、從者微笑して曰く、彼等は山腹に住し夜に乗じて山麓に下り竊に民家に入り羊豚を奪ふを以て業とするものなり、具氏又問ふて曰く、然らば何故に彼等は旅人を掠奪せざる乎、從者曰く、彼等はよく公等の懐中を熟知す、則ち人のこの山に登るものは必要品の外携

帶ずるものなれば也と具氏則ち呵々として大笑し、自ら謂へらく織は將に織女に問ふべく、路は將に土人に問ふべし、吾いまだ山に狎れず彼の徒を見て一驚を喫せしも亦笑ふべき哉と既にして頂上に達す恰も好し、天將に明けなんとし、朝暎漸く雲を破りてパーラモの山巔に跳る遙に下界を望めば朝霞滿山に鑿きて天地漸く眠りを醒せるが如し、微風斜に吾が半面を吹きて衣の輕さを覺へその快名狀すべからず、既にして火口を検せんとし路を轉じて進む、忽にして轟然一發山動き谷應へ身震ひ耳聾し何事かを辨ずること能はざ

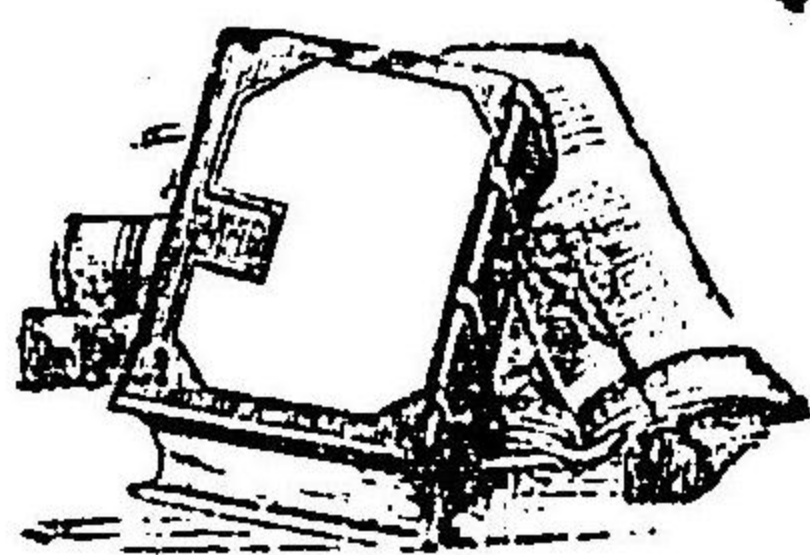
る少時、忽ち見る萬丈の火燄天を衝て長蛇の登るが如く須臾にして萬斛のラバ四方に迸り烟となり雲となり雨となり灰を吹くこと少時遂に止む。此の時具氏は僅に一溪を階て、火口に對し、幸にして其の風上に在りしが故に僅にラバに打たるゝの災を免るゝことを得たりき、

具氏既にシ、リーの絶景を究め將にこゝを去らんとす、飛報ありニユーカッスル侯より來る、氏に向て其の領地ニユーアイク選出代議士の候補者たらんことを勸むるものなり、具氏則ち旅装を理めて勿皇歸途に着

く。

當時英國の政界は貴族平民の軋轢正さに頂上に達し、
 ショー三世以來殆んど五十年間幾度か國會議場の
 問題として提出せられたる國會下院代議士選舉法改
 正案は遂に成就せられ、英國憲法史上新紀元を開き、之
 れが發議者としての自由黨は各選舉區民の興望を負
 へ黨勢破竹の如し、而も此當るべからざる大勢に抗し、
 經驗あり興望ある反對黨を蹂躪し、一身以て保守黨の
 命脈を保持せるものを誰とか爲す、謂く癸日イトナの
 山嶺に立ちし紅顔の青年、オックスフォード出身第一

流の人物たりし具氏其人にあらずや。



後 編 名士旅行逸話

一 學生の冒險旅行談

著者曰く、左の一話は逸話と謂はむよりは寧ろ立志談に屬し、米國ハーバート大學卒業生の冒險旅行談なり、而して此の冒險者は今尙ほ旅行中なれど既に成功の頂を見しと聞く、聞くさへ興味ある談話なれば爰に録して讀者の旅情を慰むるの料とはなしぬ。

元來英米人の氣風は日常の談話に於ても世界的なる

と共に極めて獨立の氣象を現はし居れり、例へば姉が濠洲に渡航せしとか、或は妹が加奈陀に旅行せしとか、或は兄が中央亞細亞に學問研究の爲め視察に出かけしとか、或は弟が商用の爲めに極東に出張せしとか、其歸りし時は、一家團欒其旅行先に於ける諸國の人情風俗地理歴史等を聞くを以て無上の快樂とせり、而して彼等は此の世界的智識を有するが上に獨立勤儉の四字を簪印として此の世界を押廻るの精神あり、例へば大學總長の子息にして學業の餘暇に靴磨を業とせるとか、或は旅館の子供が下宿人の靴磨をして幾許の貯

蓄を作りしとか、或は我が日本人にして學校に入らんとする時君は如何に學資を繼續するや、と云ふに答へて、我は勞働して之れを繼續すべしと云はゞ、彼等却て喜んで之れを保護し、呉るゝが如き、此等特殊の氣風は、我が日本人の如き、何事も引込思案にして、且つ驕奢に流れ易き國風に比すれば、國運國勢の消長偶然にあらざるを知るに足るべし。

蓋し此の談話の主人公たるハーバート大學卒業生ポール、ジョン君の如きは、此の世界的自立的國民の代表者ならむ。

サテ此事の發端を尋ぬるに、今茲一月の末つ方なりき、米國ボストン市の高等料理店の樓上に於て、今度ハーバート大學を卒業せるもののみ相集り、各自卒業を祝し、カタク、將來の交情を暖むるため、イト盛なる晚餐會は開かれたり、會員は孰れも血氣勇壯の青年、資産餘りある富豪家の子弟、特に此度學術優等の下に漸く大學の規則を免れたる卒業のホヤク、皆な未來の米國大統領を以て任じ、さなくばヴァンダーヘルト、ロツク、フエツラー、カーチギの如き大事業家を夢みて居るものばかりなれば、談論風發、意氣天を衝き、且つ種々

の遊戯は種々の人に依つて演ぜられたる末會場も次第に眞面目に成れる折、會員の一人は謂ふ、苟くも自信力を有せざるものは永久に貧窮に終らざるを得ない、然し吾輩はヨシ今日祖先傳來の財産を失ふたりとしても、またタトヒ一文なしの眞赤裸のまゝにても、一ケ年間には世界を一周し其間に五千弗の貯蓄をして歸る位は此杯のビールを飲むよりも容易いことだと酒氣虹の如く傍人なきに似たり。好奇心勃々たる會員等如何で此の壯語を聞き逃すべき、こは近頃爽快の事を承るが併し言ふべくして、實行は難いかなだ、勿論ボ

ール君の説の如きは確かに吾人の理想ではある、此の理想がソゝ容易く達することが出来るものなら世間に薄命者もなければまた不平鬼も無い譯だと多くは是れ坐上の空言として反對せざるものなかりき、ポールと呼ばれし此の發議者は争で沈黙に附すべきわれを取りまける反對者を一瞥し、然らば諸君は到底吾輩の理想が實行できんといふのか、併し吾輩は吾輩の言論に向つて確かに實行の出来るといふ自信力を持つて居るが如何だと意氣益々軒昂、コリヤ面白い、君は確かに出来るか、必ず君は實行するかと反對者皆な詰寄

る。是に於て席上また俄かに花を生じ、互ひに激論痛罵の末遂に一萬弗の賭となり、其夜は他事なく會散を告げ、二月二十二日、此の發議者たるポール、ジョン君は他の關係者と相拉して體育協會の土耳其浴場^{トルコ風呂}に赴き、茲に衣服を脱ぎ捨て、赤裸々無一物にて愈々世界周遊の途に上れり、然れども第一の困難は即日直ちにポール君の頭上に下れり、即ち彼は裸體の儘にては如何ともする能はず、彼は出立以前何物を捨て置きても一と通りの衣服を調へざるべからず、而かも今は一文の身に着きたるなければ直ちに之れを辨ずる能はず、且つ隣

踏時を移さば彼はまた飢渴の苦みをも受けざるべからず、彼は厥然起つて直ちに俱樂部に赴き爰に靴磨とはなれり。彼は靴磨に着手してより先づは飢渴を免れしとは云ひ素より僅少なる靴磨の賃銀なれば一日二日にては到底古着一枚を購ふ能はず、彼は裸體のまま、非常の刻苦勉勵を以て働き、第十四日目にして辛くも旅立に足るの衣服を調ふことを得たり、嗚呼この十四日間誠に月の半に足らざるの日子なれども彼れが約束の十二月より打算せば、如何に此の日子の長かりしよ、何となれば彼は世界を一週せざるべからず、彼

は此の旅行間に五千弗の貯蓄を成さざるべからず而して此の二大約束を僅かに一年間に果さざるべからざれば也。彼は第一の困難に打勝てり、更に第二の困難と闘はざるべからず、即ち彼は此の世界周遊の途に上るに當りタトヒ如何なる方向よりするも一文の旅費なくしては一步を踏み出す能はず、而して彼は既に旅程の順序として、先づ英國に航し印度に赴き、支那日本を経て米國に歸るべく計畫を立てたり、旅程の計畫成ると雖も旅費なくしては亦如何ともする能はず、彼は此の旅費を整へんが爲めに朝は新聞賣子となり日

中は擔夫となり、尙ほ餘暇あれば、彼は英佛獨伊の語學に通ぜるを利用して通辯となりしが、就中彼が得意の通辯は最も成功し、或者の通辯者に雇はれ無賃にて英國に乗船することを得たり、而して其英國に着するや、彼は既に五十弗の貯蓄を有せりといふ。彼は英京倫敦に着し、囊中五十弗の貯蓄を利用して得意の講演を開き、蓋し世界週遊に就ての講演なるべし、傍聴料を徴收し、僅かにして五百弗餘の資本を獲たり、かくて彼は此の五百弗の利用法に就き、苦心工夫の末、倫敦市中の各新聞社に赴き、自己の世界週遊者たるを明し、其旅行

先より通信することを約し、以て印度航海に要する費用を得、一面彼は五百弗の資本を以て雜貨商品を買入れたり、是に於て彼は計畫の如く印度に航し、機智と勉強とを以て商業を営みけるが雜貨商品の撰擇極めて好く需要者の嗜好に投じたりけん彼はカルカッタ市に於て過大の利益を占め、米國出立以來未だ半歳ならずるに既に今日の貯蓄額は約束の高に達せりといふ彼は今尚ほ旅中に在り而して關係者に書を寄せて曰く、今にして想へば余は諸君と約するに、何故に其貯蓄高を二倍して其賂額を二萬弗にせざりしを悔ゆと。

二 佐野常民伯の犢鼻褌談

曩きに佛國巴里に萬國大博覽會を開設せらるゝや、我國出品の事務官長として佐野伯を遣はして之に臨ましむ、伯性未だ全く古風を脱せず、身には洋服を着くるも腰間尚ほ六尺の犢鼻褌をめぐらすを常とす、伯は此の赴任の折にも褌は伯に追隨して赤道下を航し、紅海地中海を渡り、更に大陸を横斷して巴里に入り、一ホテルに宿す、其間數十日の旅行なれば伯は腰間の褌を解くに違なく、異臭紛々として心地甚だ悪し、而も斯の如き物體之れを他邦人に托して洗濯するを憚る、伯一

日館の浴室に入る、室内他に人なし、伯密かに垢染みたる禪を取り手づから之れが洗濯を始め、忽ちにして突雲の大ポイイ扇を排して入り来る、伯倉皇急ぎ之を隠さむとせしが早くも此のポイイの爲めに見付けらる、ポイイ何やら嘸々嘸々禪を奪ふて急に室外に去れり、伯元と佛語に通ぜず、故にポイイの意を領する能はず、竊かに以爲らく、身東方帝國の一官長として此地に至り、犢鼻禪を取りて之れを浴室に浣ぐ、是れ我一身の不名譽のみならず、若し彼のポイイの口より發表せられなば、誠に國家の體面を汚すの憾みあり、あゝ常民畢

生の失錯之れに過ぐるはなしと、數日憂色面に溢ふる、既にして一日前きの大ポイイ恭しく一函を捧げ来る、伯其蓋を披きて之れを檢すれば、何んぞ知らん前きに浴室に於て奪ひ去られたる犢鼻禪の最と清らかに洗濯せし上、スターチを塗り蠟を曳き、之れを三折にしてあらむとは、是に於てか伯は思へり、前日ポイイの禪を奪ひし折我に謂へしは、唯此一事を便せんが爲めなり、蓋しポイイも亦此布片の何たるを知らず、故に以て此に及べるかと伯始めて相互の誤解を領し、數日の愁眉を開くを得たりといふ。

三 菊地侃二氏の瀛車乗越

菊地侃二氏といへば、容姿秀麗、資性需逸、動作頗る機敏にして、一見才子の風ある好政治家として、久しく大阪地方に於ける自由黨の牛耳を執り、憲政内閣の組織せらるゝや、一躍して大阪府知事となり、治蹟また見るべきものありき、氏嘗て要件を帶し、大阪發一番瀛車に乗じて京都に赴かんとす、然るに曉來睡味未だ全く覺めず、昏氣頻りに神を襲ひ來る。縦し一睡を列車中に貪らむと、氏は特に人なき上等室を擇び、之れに乗るや否や、胸然雷の如し、既にして瀛車は京都を過ぎ、稻荷を經

て大谷に着す、氏急に夢より出でて目を摩つて曰く、「モ、は何處じや、モ、京都か、車掌曰く、「大谷です」と、氏初めて瀛車の乗り越せるを悟り、倉皇車を下り、更に下り列車を待つて京都に乗り返へす、人あり氏に戯れて曰く、「如何に機敏の菊地さんでも睡むちや、三文の價値なし」と、氏屈せず之れを辯じて曰く、「廬生能く睡つて人生の無常を悟り、莊周夢に蝴蝶と化して、浮世の是非を泯滅す、廬生を學び、莊周を慕ふもの十九世紀の今日、僕に於て初めて之を見る、睡眠豈に三文の價値なしと謂ふべけんや」。

四 磯部四郎氏の巴里遊學

法曹界にて能く飲み能く談じ能く戯れ且つ極めてインキの滑稽漢として有名なるは磯部四郎氏なるべし。氏曾て官命を帯び、法律研究の留學生として笈を佛都巴里に負ふ、然して氏と共に官命を帯びたる同人等は皆々孜々として勉學是れ努むるにも拘はらず、氏は獨り學を廢して暮夜各所に轉戦を好み花月に親み却て之れが寧日なきに似たり、留學の同人竊かに氏を詰る、氏曰く徒らに門を閉して書を講ずべくば何ぞ必ずしも遠く三千里外に出遊するを須ひん、彼の讀書百遍始

めて其意を解するの徒は須らく學ぶべし、我は唯夫れ優遊花月を友として靜かに世態の異趣を觀察し、聊か以て國恩に報へん、蓋し我が政府の我輩に待つ所以また此に在らんと、かくて氏は歸朝の日、實に三千六百餘圓の債務を我が國庫に負へりしといふ。



五 増島バリストル鐵道をへこます

増島バリストル管て所用を帯びて關西地方に旅す横濱停車場にて法廷用帽子入の函を携へ來り手荷物として其取扱を荷物係に求む然るに荷物係は之れを査視し此は小荷物なれば相當の賃金を拂ふべしといふ是に於てバリストル之れを肯んぜず直ちに驛長に談ず驛長も亦小荷物として敢て下らずバリストル已むを得ず自ら之れを携帶して乗車し歸る今日法曹界に於て増島バリストルと云へば法律家と謂はむよりは寧ろ法律其物の如く世間に思はれ居るだけありて焉

ぞ驛長の法律誤用を默許せむや氏は歸京の後鐵道運輸規程第三章第二十六條に依れば旅客其旅行に必要なる物品は凡て之れを手荷物と認むとありされば法廷用帽子の如きは余が裁判所へ旅行の必要品なれば無論手荷物たるにも拘はらず彼れ係員等は徒らに權柄を弄して法律を曲解し累を乗客に及ぼすや甚しとの旨を書面に認め直ちに之れを芳川遞信大臣に忠告せり幾もなく大臣は運輸課長をして右は全く係員の運輸規程を誤解せるに本づくものなれば相當の訓戒を加へたりといふ殆ど謝罪に等しき返事を出さしむ

之れを聞ける鐵道局の人々は却て氏の何事にも根氣よきに舌を巻きしといふ。



六 幸田露伴氏の旅路の掟

露伴は文士中の文士なり、此人日本全國大概草鞋の下にしたるほどの旅行家なりと聞く、いかさま旅路の露伴に添臥の雅號の由來を承りても然か思はる、文士は坐らにして天下の形勝を知るとは當にならず、親しく天下の風雅を發揮せむと欲するの文士は、須らく露伴の如く豆にあるくべし、左に録せるは露伴氏の旅路の掟なり、苟も旅に志すもの此掟に依らば蓋し過つも咎少なかるべし。

旅路の掟

- 一 良き衣を着るべからず雨上りの泥濘道にて牛馬の爲に思はぬ汚れを受くる事などありても粗服したらんには腹立薄く心安がるべし、
- 一 相手さらはず馬士にも順禮六部にも縁あるものには愉快に話しすべし但し自慢話は場合によるべし、
- 一 酒は深山の中大海の邊の外は用うる勿れ新識の人と飲むを堅く禁ず眼の力を弱くし心の働きを鈍くし淫慾を増長せしむるものなれば能々心すべし、
- 一 遊廓をば徘徊すべし但ししらふの時に限るべし、
- 一 都ての人に和しくすべし拳骨を振まはす事謹むべし、

し、争闘して勝ちたる後松並木の間を通る時殊の外恐しきものなり、

一 宿屋の娘下女など姿美しく、眼付に品ありとも、未練に逗留すまじき事、

一 宿屋にて惣飯貰ひたれば大切にすべし、途中にて乞食などに與ふべからず、

一 知らぬ女一人と道づれになるまじき事、悪きもの多し、

一 相宿を悦ぶべし、謝絶て後美人俳諧師となりし時は口惜しからん、

一宿帳正直に記すべし、柿本人丸嫌疑を受けて御上の御手敷を掛くるなどはおもしろきことにあらず、
 一無暗と近道抜け道などを問ひたづねて歩むべし、迷ひ込みても大抵生きて歸るものなり、但し午前の事なるべし、

一宿屋にて髪鋏み、髭剃りするは無風雅なり、必ず脚半のまゝにて其目印ある家に入り込むべし、

一車馬などに乗るは心得あるべし、

一草鞋は價の昂さを買ふべし、

一大きな峠の峯より此方の水と彼方の水と共に飲

むべからず、異風の食物驚くべからざる事、

一道中すべて西行じみたるを尊しとす、

右條々の外に捨子を拾ひ、禽合戦の彌次馬に出る等は隨意なるべし、

明治二十二年七月

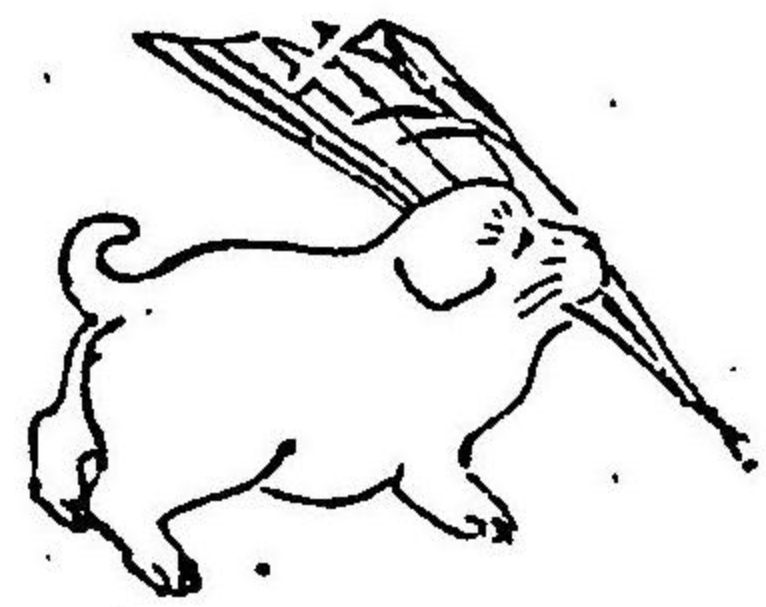
蝸牛角上人



七 土方伯瘦馬を敬禮す

土方伯旅に出づるや折柳の痼癖あり曾て歐洲を週遊して英京倫敦に着するや人あり伯の未だ西音に通ぜざるが爲め貴婦人に對する辭令を失はむことを懼れ、豫め之れを伯に教ゆ伯三復して始めて之を記す然るに客舍淹留の久しき無聊寂寞の感に堪へずやありけむ伯は例の痼癖に驅られ每宵傍人の目を忍びて楊州の瘦馬を嫖す然れども西音に通ぜざる伯は素より彼等を翻弄する筈もなく彼我黙々宛から暗啞の相對するが如く手まね身振りによりて僅かに其意を通ずる

のみ只だ其別れ去るに臨み伯は脱帽握手懇懃禮を施して曰く Madame adieu 貴女御氣嫌宜うと瘦馬笑を忍びて伯を戶外に送り出すや馬輩相顧みて抱腹絶倒す蓋し伯は貴婦人に對するの辭令を活用せるならむ呵



八 故後藤伯お芋を托せらる

ある年の夏の頃とか、大磯灣頭を漫歩する一個肥胖せる禿願の老紳士あり、時に一人の村童懷に數本の薩摩芋を抱き濱風に吹かれながら且つ食ひ且つ歩みつ來る。老紳士の前に近き仰ぎ見て曰く、オヂさん此のお芋を持つて、お呉れな。今ま奇麗な貝を拾つて來て進げる。からと老紳士笑ひを帯びて之を領す。村童乃ちホヤくとイキの立つ芋を懷より取り出し、之を老紳士に預け岸に打上ぐる波間をあさりて色々の貝を拾ひ來り。其内二三個を老紳士に與へ、更に預けある芋を受取

り、村童は悠然として立ち去る。老紳士跡見送りて獨り呆然たり。此の老紳士を誰とかなす、謂く當時の農商務大臣故伯爵從二位後藤象二郎氏なりき。



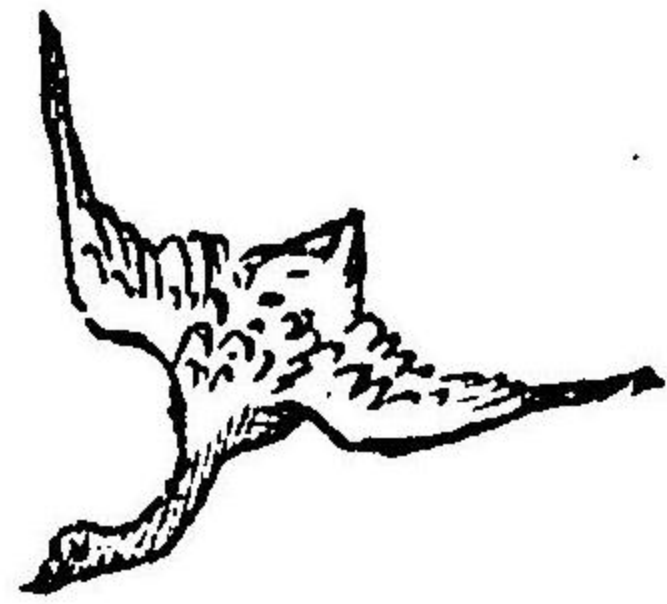
九 鳩山春子女史米國に於て政黨改造を

説く

米國エール大學に於て創立紀念百年式を擧げらるゝに際し我國の代表者として鳩山和夫氏をして出席せしむ、春子夫人また良人と共に米國に赴く時に歐米漫遊の途に上りありし伊藤侯も亦エール大學の學位授與式に列せんとし、鳩山氏夫婦と落合ひたるにぞ、春子夫人は此機逸す可からずとや思ひけん、侯爵に對し政黨改造伊隈聯合の大問題を交渉に及び、論鋒なか〜銳利にて『あなたさへウント仰ツしやりや大隈さん

は無論御賛成なさるに決つて居ます、今日の場合はおなたと大隈さんが御一所におなりになつて立憲的内閣を組織なさらなくつては日本の前途は實に憂ふべきものではありませんか』と喋々喃喃一代の智辯を揮ふて説くや、流石の伊藤侯も大に閉口の體にて『能く分りました、しかし我輩は我輩で遣り大隈は大隈で遣つた方が宜しいではありませんか』と曖昧の挨拶を爲し和夫氏を顧みるに、氏は終始其側に在て謹聽し居られしとぞ、その後侯はある人に向つて『あの勢では大隈も時々襲撃せられて困る事があるぢやらう』

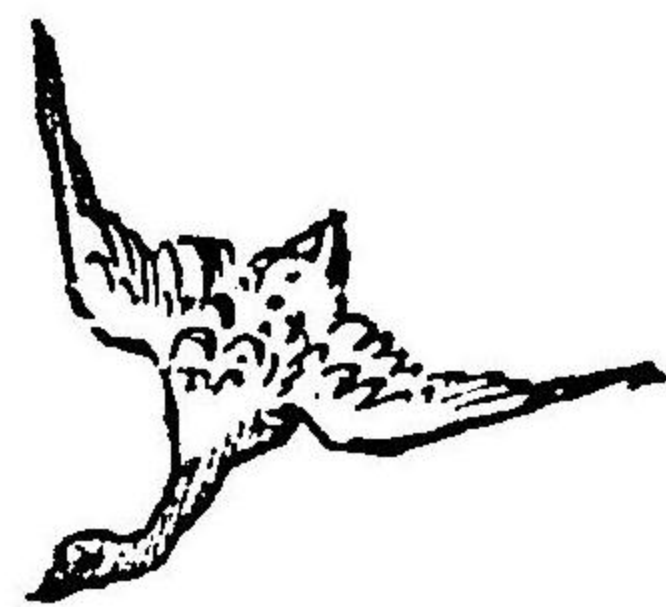
と語られし由。



十 ダルムバラ氏の鳥鍋物語

我が邦人が遠く歐米に出懸けて、人情風俗の異なるより種々の失敗を醸し、爲に外人の笑を招ぐと共に、外人また我が國に來遊して種々の錯誤を生ずること少からず。印度人ダルムバラ佛教視察の爲め來りて駿河臺の某旅館に投ず、ある一日、晝食に際し、氏は下婢に命するに鳥鍋を以てす。下婢心竊かに氏の甚だ我が内地の事情に通ぜるを驚き、且つ怪みつゝ、命の如く鍋及び鳥の生肉とを捧げ氏の前に薦む。氏は之れを見しが、其意を得ざるものゝ如く、唯だ呆然たり、蓋し氏は是

と語られし由。



十 ダルムバラ氏の鳥鍋物語

我が邦人が遠く歐米に出懸けて、人情風俗の異なれるより種々の失敗を醸し、爲に外人の笑を招ぐと共に、外人また我が國に來遊して種々の錯誤を生ずること少からず。印度人ダルムバラ佛教視察の爲め來りて駿河臺の某旅館に投ず、ある一日晝食に際し、氏は下婢に命するに鳥鍋を以てす、下婢心竊かに氏の甚だ我が内地の事情に通ぜるを驚き、且つ怪みつゝ、命の如く鍋及び鳥の生肉とを捧げ氏の前に薦む。氏は之れを見しが其意を得ざるものゝ如く、唯だ呆然たり、蓋し氏は是

まで歐米を漫遊するも未だ曾て生肉の料理を食せし
 ことなければ也。下婢且く其状を見てありしが、今更
 ながら氣毒に思ひ、宛も小供に物を教ゆる如く、是れが
 鳥、是れが鍋、鳥鍋なりと一々説明すれども、音意更らに
 通ぜず、是に於て下婢大に苦しみ、種々の方便を以て漸
 く氏の意を領するを得たり、即ち氏は此朝の料理に鳥
 肉のシチエーを出せるを甘しとなし、晝食にも之れを
 欲しく思へども、其料理の名を知らざりしより案内用
 の英和字書を引き見るに、ヘンはトリ、シチエーはナベ
 とあるゆへ、氏は大いに其調べ當てたるを喜び、ヘンス



チエーを轉訛してトリナベと誤れるなりといふ。

十一 松方伯門出の壯語

松方伯は我國財政家の元勳として其名内外に知らる
 伯歳既に七旬の高齡に達するも、人膽丸を服し昆棒を
 振り、元氣尙ほ少壯者を壓するものあり、曩きに歐米財
 政視察の爲め鹏程萬里の途に上らむとするや、發する
 に臨み客に語りて曰く、世人動もすれば後進有爲を稱
 す、余等老朽固より新進に待つ者多し、然れども眞に待
 つべきの新進出てざるを如何せん、試みに余が財政の
 局に當りしより以來二十年の間を見よ、如何なる新進
 の後繼たるに足る者を出せしや、大計畫大決斷却て常

る
 一

に老人の手に待つあるに非らずやと、意氣昂然、世の生
 半可漫りに後進有爲を以て任ずる群小政治家をして
 顔色なからしむ、客亦啞然として去る、



十二 加藤高明氏の旅行談

氏は曾て青年の爲めに旅行の必要を説き、且つ今日旅行するもの、弊害を摘發して曰く

「旅行は山川跋涉風俗人情の觀察、古蹟探見など讀書と同様或は讀書以上の利益があつて、内地旅行も可い、が海外旅行の方が利益が多い、海外旅行には金が随分懸るが、それは私が如何かして上げると言ひたいが、御断り申す、それは兎に角今日の旅行は往くものも送るものも満て交際的旅行である、それ誰やらが洋行する、送別會をする、歡迎會をする」と云ふやう

な事が殆ど毎日のやうにあるが、チヨット三ヶ月か六ヶ月上等の船と上等の汽車で旅行した者、寧ろ家に居るより樂して來た者を恰もスタンレーが亞弗利加から歸つたか、ナンセンが北極から歸つた時のやうに歡迎する、私共餘義なく出席するが心中甚だ面白くない、格別縁故もない人に回狀をまはして帝國ホテルへ寄るとか、紅葉館へ寄るとかして立つときは横濱まで必ず急行列車に多勢が乗る、一般の旅客には甚だ迷惑である、翌日の新聞には留守宅として御禮の廣告が出るが、留守宅といふ人間であるか、

家であるかサツパリ判らない爾うして出立する人
に向つて大なる土産を望むなど、演説する者があ
るが、チヨツト行つた位で左様な大きい土産があつ
て溜るものか……」

必學生旅 行 之 友 終

附 録

●外國旅券規則

(明治三十三年六月
外務省令第二號)

外國旅券規則左ノ通相定ム

外國旅券規則

第一條 外國へ旅行スル者ニ下付スル旅券ハ外務大臣之ヲ發行

シ外國ニ於テハ公使及ヒ領事ヲシテ之ヲ發行セシム

第二條 旅券ノ下付ヲ請フモノハ左ノ事項ヲ記載シ内國ニ於テ

ハ本籍地若ハ所在地ノ地方上級行政廳外國ニ於テハ公使館

若ハ領事館ニ出願スヘシ但シ内國ニ於テハ戶籍ノ謄附スル

コトヲ要ス

- 一、氏名(片假名ヲ以テ傍
翻ヲ附スヘシ)
 - 二、本籍地(本籍地所在地ト異ナルト
キハ所在地ヲ併記スヘシ)
 - 三、身分(戸主家族ノ別、家族ナルトキハ戸主ノ
氏名及ヒ戸主トノ續柄ヲ記載スヘシ)
 - 四、族稱
 - 五、年齢
 - 六、職業
 - 七、旅行地名
 - 八、旅行ノ目的
- 長崎縣下對馬國ニ本籍若ハ所在地ヲ有スル者ニ限り對馬島
應ニ出願スルコトヲ得
- 臺灣ニ於ケル旅券ノ下付ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル

- 第三條 官命ニ依リ旅行スル者ハ内國ニ於テハ其所管官廳ヲ經
由シテ外務省ニ外國ニ於テハ公使館若ハ領事館ニ旅券ノ下
付ヲ出願スルコトヲ得但シ前條第一條第七號及第八號ノ事
項ヲ開申スヘシ家族若ハ從者ヲ同行スルトキハ同行者ニ係
ル前條第一號乃至第五號ノ事項ヲ併セ開申スヘシ
- 官命ニ依リ外國ニ在ル者其所在地ニ家族若ハ從者ヲ呼寄セ
ムトスルトキハ旅券下付ノ出願ニ關シテ前項ノ規定ヲ準用
スルコトヲ得
- 第四條 戸主ト同行スル家族、夫ト同行スル妻又ハ父若ハ母ト
同行スル子ニシテ旅券ノ下付ヲ請フトキハ其氏名身分及ヒ
年齢ヲ戸主、夫又ハ父母ノ旅券ニ併記スルコトヲ得但シ夫

ト同行スル妻ヲ除クノ外未成年者タル場合ニ限ル

第五條 移民保護法ノ規定ニ依リ移民取扱人ニ依ル移民又ハ保證人ヲ要スル移民ニシテ第二條ノ出願ヲ爲ストキハ移民取扱人又ハ保證人ノ連署ヲ要ス

第六條 本令第二條ニ依リ内國ニ於テ旅券ノ下付ヲ出願スル者ハ之ヲ領收スルトキ一枚ニ付キ手数料トシテ收入印紙五十錢ヲ旅券領收書ニ貼用スヘシ外國ニ於テ公使ノ徵收スル旅券下付手数料ハ領事ノ徵收スル旅券下付手数料ニ依ル

第七條 旅券ヲ領收シタルトキハ直ニ其ノ券面ニ署名スヘシ旅券面ニ査證アルコトヲ必要トスル國ニ旅行スル者ハ其ハ其ノ定ムル所ニ依リ査證ヲ受クヘシ

第八條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ旅券下付ヲ受クルコトヲ得ス但シ第二號ニ該當スル者ハ清國若ハ韓國ニ旅行セントスル場合ヲ除クノ外此ノ限ニアラス

一、豫戒命令中ノ者

二、清國若ハ韓國在留禁止命令中ノ者

第九條 旅行者歸國若ハ歸着シタルトキ又ハ本令第二條ニ依リ旅券ノ下付ヲ出願シタル者其ノ領收ノ後六箇月以内ニ出發セサルトキハ旅券ヲ返納スヘシ
旅券ノ下付ヲ受クタル者死亡シタルトキハ遺族ヨリ之ヲ返納スヘシ

第十條 商業漁業其他職業ノ爲數次往復スル者ハ歸國若クハ歸

ト同行スル妻ヲ除クノ外未成年者タル場合ニ限ル

第五條 移民保護法ノ規定ニ依リ移民取扱人ニ依ル移民又ハ保證人ヲ要スル移民ニシテ第二條ノ出願ヲ爲ストキハ移民取扱人又ハ保證人ノ連署ヲ要ス

第六條 本令第二條ニ依リ内國ニ於テ旅券ノ下付ヲ出願スル者ハ之ヲ領收スルトキ一枚ニ付キ手数料トシテ收入印紙五十錢ヲ旅券領收書ニ貼用スヘシ外國ニ於テ公使ノ徵收スル旅券下付手数料ハ領事ノ徵收スル旅券下付手数料ニ依ル

第七條 旅券ヲ領收シタルトキハ直ニ其ノ券面ニ署名スヘシ旅券面ニ查證アルコトヲ必要トスル國ニ旅行スル者ハ其ハ其ノ定ムル所ニ依リ查證ヲ受クヘシ

第八條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ旅券下付ヲ受クルコトヲ得ス但シ第二號ニ該當スル者ハ清國若ハ韓國ニ旅行セントスル場合ヲ除クノ外此ノ限ニアラス

一、豫戒命令中ノ者

二、清國若ハ韓國在留禁止命令中ノ者

第九條 旅行者歸國若ハ歸着シタルトキ又ハ本令第二條ニ依リ旅券ノ下付ヲ出願シタル者其ノ領收ノ後六箇月以内ニ出發セサルトキハ旅券ヲ返納スヘシ
旅券ノ下付ヲ受クタル者死亡シタルトキハ遺族ヨリ之ヲ返納スヘシ

第十條 商業漁業其他職業ノ爲數次往復スル者ハ歸國若クハ歸

着毎ニ其ノ旅券ヲ返納スルコトヲ要セス但シ旅券領收ノ日ヨリ三年ヲ過キテ歸國若歸着シタルトキハ之ヲ返納スヘシ

第十一條 旅行十年ニ及ヒ歸國セサルモノハ旅券ヲ領收シタルトキヨリ十年以内ニ公使若ハ領事ノ查證ヲ受クヘシ其ノ後十年ニ及フ毎ニ亦同シ

第十二條 旅券ヲ領收シタル者第八條各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキ亦ハ第二條第一項第一號乃至第三號及第八號ノ事項ニ變更ヲ生シタルトキハ直ニ旅券ヲ返納スヘシ

第十三條 旅券ヲ紛失シタルトキハ直ニ届出ツヘシ之ヲ發見シタルトキ亦同シ

第十四條 本令ノ規定ニ依リ旅券ノ返納亦ハ其ノ紛失若ハ發見ノ

届出ヲ受クヘキ官廳ハ内國ニ於テハ地方上級行政廳及對馬島廳外國ニ於テハ公使館及領事館トス

第十五條 第二條第一項各號ノ事項ヲ詐稱シ若ハ第八條各號ノ一ニ該當スル者ノ其ノ事實ヲ申告セス其ノ他詐欺ノ所爲ヲ以テ旅券ノ下付ヲ受クタル者ハ其ノ旅券ヲ取上ケ二十五圓以下ノ罰金亦ハ二十五日以下ノ重禁錮ニ處ス之ヲ幫助シタル者亦同シ

第十六條 他人ノ氏名ヲ記載シタル旅券ヲ使用シ亦ハ之ヲ使用セシメタル者ハ其ノ旅券ヲ取上ケ二十五圓以下ノ罰金亦ハ二十五日以下ノ重禁錮ニ處ス

本令ニ依リ返納スヘキ旅券ヲ返納セスシテ使用シタル者亦同シ

附 則

第十七條 本令ハ明治三十三年七月一日ヨリ施行ス

明治十一年外務省布達第一號海外旅券規則及明治三十年外

務省令第六號ハ之ヲ廢止ス

〔參照〕 明治三十年十一月外務省令第六號ハ對馬國ヨリ韓國

へ渡航スル者ニ限り對馬島廳へ出願シ海外旅券ヲ受クルコ

トヲ得ルノ件ナリ

● 内外郵船乗客賃金表

● 四歳迄は無賃 ● 十二歳迄は半額 ● 往復切符は九十日有効にて大凡二割引但し一等に限る手荷物は一等十二貫目迄 ○ 二等九貫目迄 ○ 三等六貫目迄の分は無賃也

○ 横濱より

市 田 社 島 島 島 島 島 島 島 母 父 島 青 八 三 神 半 津 四 日 宅 丈 黄 の 嘉 嘉 倫 古

百五十五圓	百十五圓	百十四圓	百十二圓	百十一圓	百十圓	百九圓	百八圓	百七圓	百六圓	百五圓	百四圓	百三圓	百二圓	百一圓	百圓
百五十五圓	百十五圓	百十四圓	百十二圓	百十一圓	百十圓	百九圓	百八圓	百七圓	百六圓	百五圓	百四圓	百三圓	百二圓	百一圓	百圓
百五十五圓	百十五圓	百十四圓	百十二圓	百十一圓	百十圓	百九圓	百八圓	百七圓	百六圓	百五圓	百四圓	百三圓	百二圓	百一圓	百圓

多高打安涉基八沖大鹿鎮浦元天芝仁木釜對長下月アメシアタ
 度 湖 重 兒南 津、牛 の レボ ス、ウ
 津松狗平島隆山繩島島浦鹽山莊榮川浦山馬崎獨 ドンインル

三二四四四三二二二十十三五四六五四三二二二十 四卅卅卅卅
 圓十十十十十十十十十十十十十十十十十十 十八磅四磅
 七十五一六一九五五五五五五五五五五五五五 十磅十磅十
 圓錢圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓 志志志志志

二一三三廿二十十十八二二三三四四三二二十十七 廿廿廿廿廿
 圓十十七四二五十四八十五十十四十八二 七磅磅磅磅
 八十一十十十十十十十十十十十十十十十十十 十磅十磅十
 圓錢圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓圓 志志志志志

一一十十十十九七五十五十十十十九六六四三 十十十十
 圓圓八六八圓二 二四 八五 五四三二
 卅二十十十十十十十十十十十十十十十十十十 磅磅磅磅
 五十五十十十十十十十十十十十十十十十十十 志志志志

木ア倫リ新セシシヤシガスミセウタウホシア倫馬ホ上長下孟
 ント ヴン ヲン シュン シュン ヲン ニン アト ク コ ア シ ト ヤ ト 耳 の
 囉 ー ア 約 ト、カ、ク、ス、イ、ベ、リ、ボ、ト、リ、マ、ド、ル、ア、敦、塞、下、海、崎、關、買
 島ア敦ル克イゴインスリスルヤマドルア敦塞下海崎關買

廿二 二百 百八 百七 百七 百卅 百三 四 四 三 五 三 二 百
 四 百 八 七 七 卅 三 四 五 十 十 十 十 十 十 十 十
 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅
 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

百七 百六 百三 百三 九 九 三 二 二 三 十 十 百
 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅
 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

八 百 百 八 六 六 二 二 百 百 百 十 七 五 六
 百 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅 磅
 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十 十
 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

31/7/40

附 録 終

根 渚	厚 劍	○函館より	○青森より	佐直伏敦境細大三门三廣尾
室	中 岸 路	蘭 館	津、馬	津、馬
八	七	六	七	三
圓	圓	圓	圓	圓
六	五	三	五	八
十	十	十	十	十
錢	錢	錢	錢	錢
錢	錢	錢	錢	錢

明治三十五年七月六日印刷
明治三十五年七月九日發行

旅行之友

正價金貳拾錢

不許複製

編輯者 大内徳亮
 發行所 野口安治
 印刷所 石川金太郎
 印刷所 英舍
 東京市小石川區指ヶ谷町百廿三番地
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 東京市小石川區指ヶ谷町
 東京市神田區表神保町
 其他全国各地書藉雜誌新聞販賣各店

發行所 東京市小石川區指ヶ谷町
 東京市神田區表神保町
 其他全国各地書藉雜誌新聞販賣各店

發賣元

文光堂

筆戰之良友

文壇秀才

每號當代名家之雄編と選評あり續々投稿あれ

二卷 第八號
 發行日十月七
 定價
 每月十元
 紙數大拾百頁
 前金拾元
 六元
 七元
 前金拾元
 郵送八元
 外金拾元
 郵送八元
 一冊外金拾元
 郵送八元
 券代用壹圓
 郵送八元
 實冊東京堂其
 各地書籍雜店

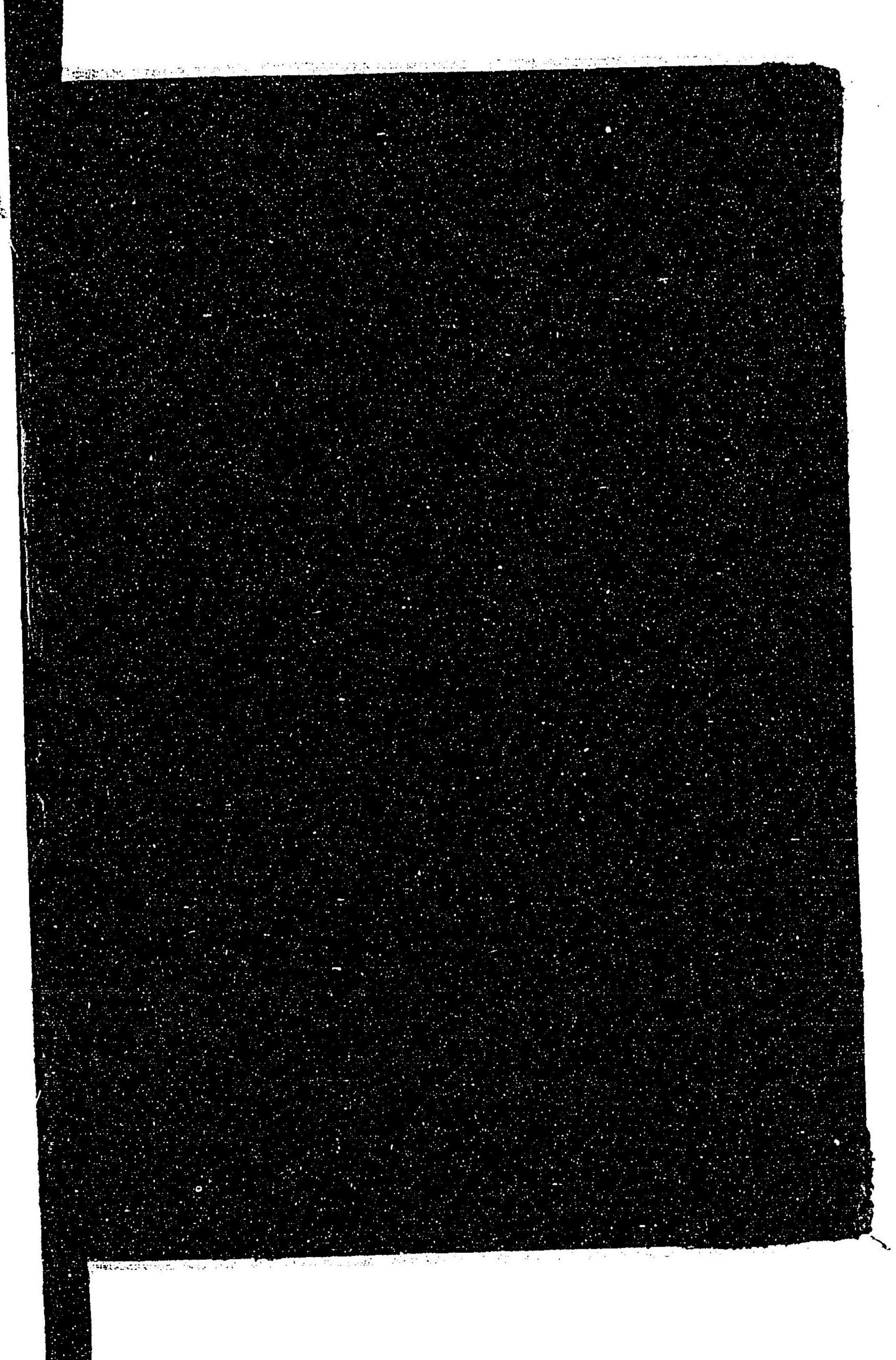
東京區石川
 文光堂發行
 指三町三
 百三十三

友壇六萬人以上

每號當撰者肖像名家筆蹟寫真口繪數葉挿入す

94
58

2/14/44



023158-000-2

94-58

旅行之友(学生必携)

大内 徳亮/編

M35

ADB-1204



